

ISLA研究が変える外国語教育

理論と実践の新たな架け橋

鈴木祐一
(早稲田大学)

最近の取り組み

研究と実践の橋渡しをしたい

英語教師向け

日本の中高における先駆的な文法指導について調査。

2020年



英語学習者向け

英語学習に纏わる日頃の疑問にSLA専門家が答える。

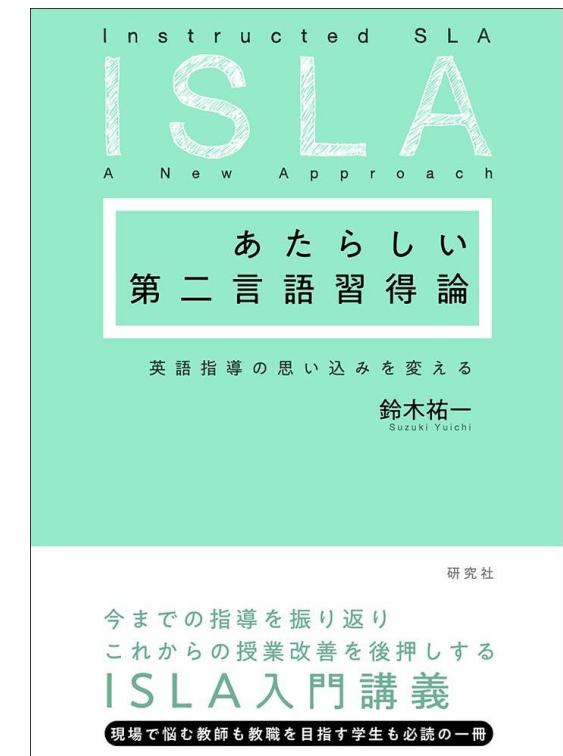
2022年



英語教育関係者向け

英語教育×指導場面でのISLA研究

2024年 10月

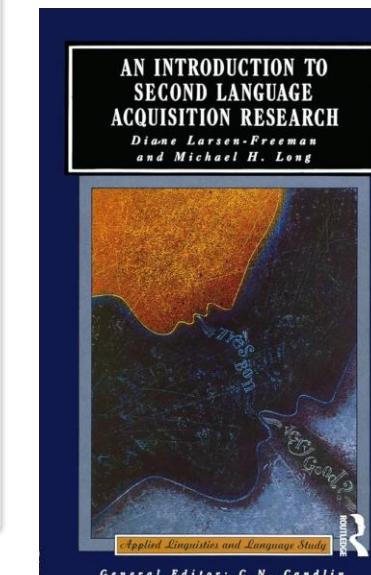
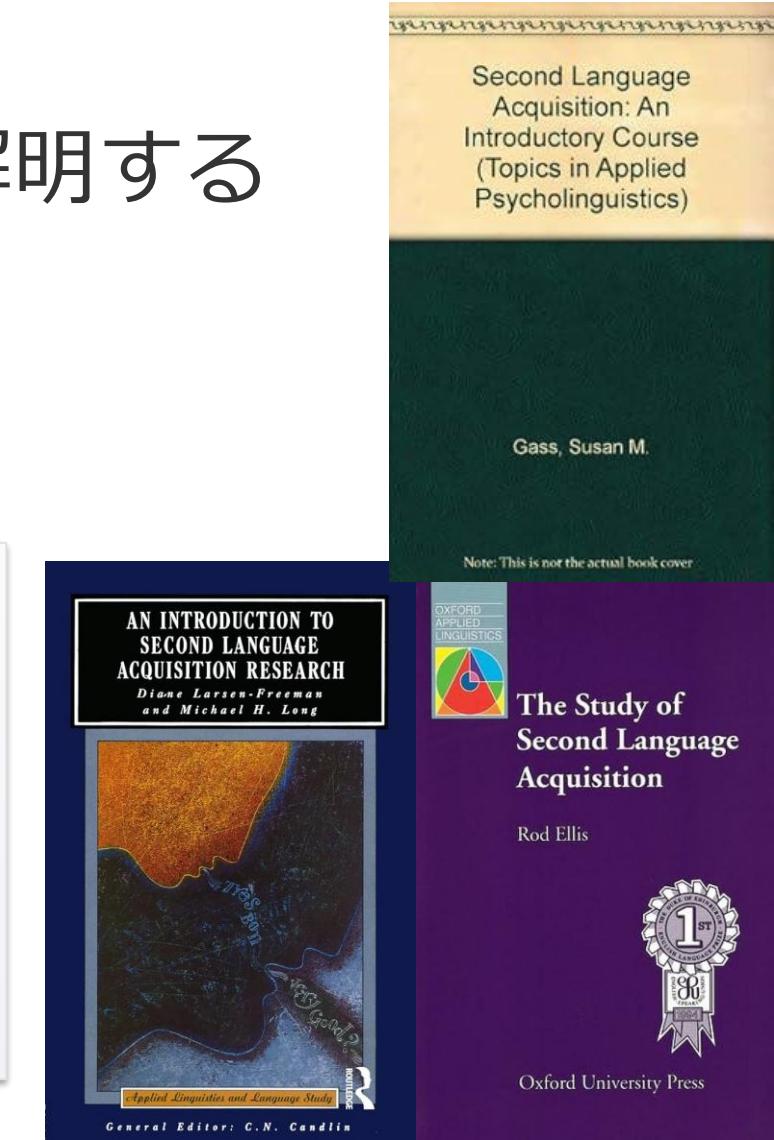


第二言語習得 (SLA) 研究とは？

1960年代に欧米で生まれた研究領域

第二言語のメカニズムを実証的・科学的に解明する

- 移民（子ども・大人）/ESL
- 母語習得と第二言語習得はどう違うのか？
- インプット、インタラクション、アウトプットの役割



Oxford University Press

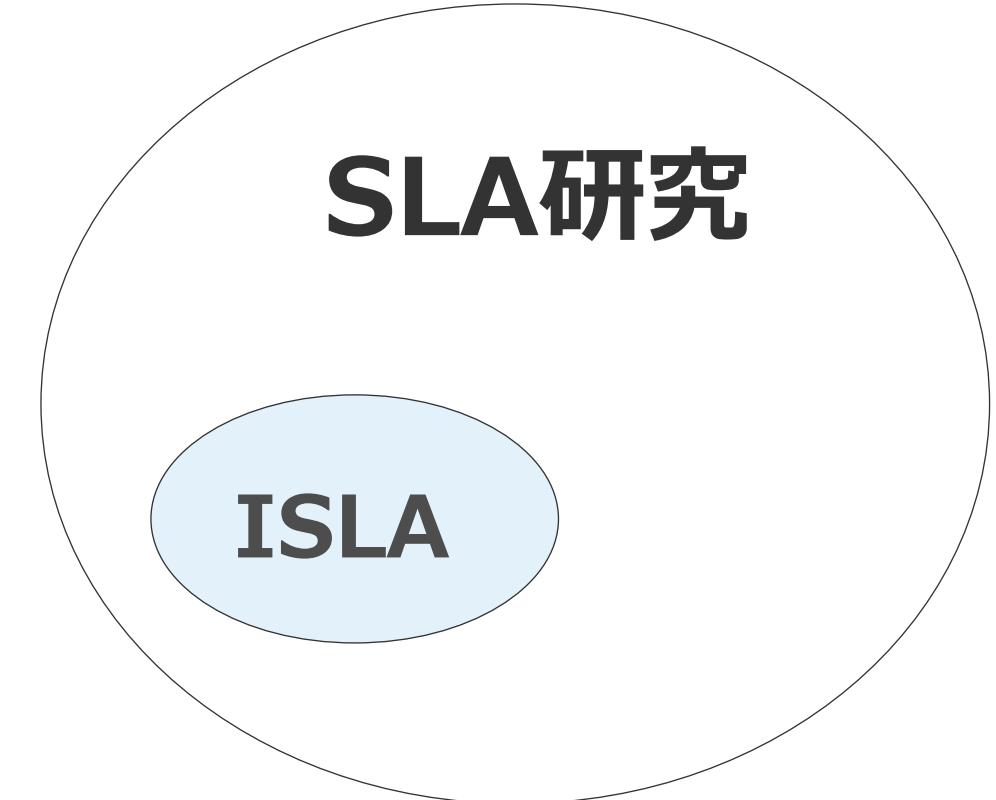
SLA研究からISLA研究への発展

1990年代以降

教室場面におけるSLA

= **Instructed SLA (ISLA)**への広がり

- 外国語教育を受ける生徒・学生
- 指導効果
- 個人差への対応
- 教育心理学・認知心理学の影響



ISLA研究の目的とは？

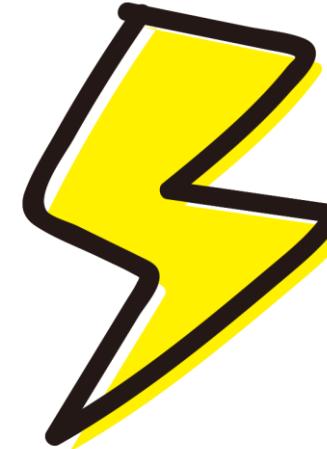
- Loewen (2020): ISLA's mission as investigating the "**systematic manipulation of the mechanisms of learning**" in instructed settings.
- Sato (2025): "a discipline that investigates theoretical and practical language-related issues with the ultimate goal of **improving second language education**" (p. 2).
 - "to inform practitioners of research findings that can be potentially used for their **pedagogical decision-making**"

2つの主な方向性

- 1. 理論構築** 外国語学習者に共通する指導効果や習得プロセスの「一般性」を探求し、これらの現象を普遍的に説明できる体系的な知識体系（理論）を構築する。
- 2. 実践への貢献**：外国語教育（=実践）をより良いものにする

一方で、研究と実践にはギャップがあるのも事実

研究

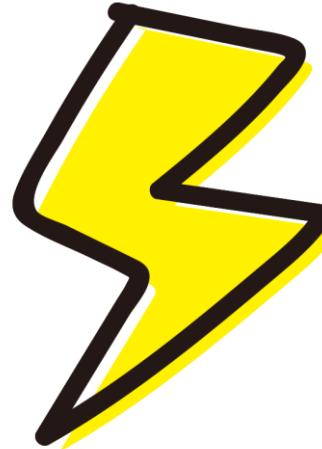


授業実践

研究と実践には繋ぐには？



研究



授業実践

本講演 研究と実践を結ぶための3つの視点

対象：ISLA研究を、外国語教育に役立てたいと考えているすべての研究者・大学院生・教員

1. ISLA研究の知見の使い方
2. 研究と実践のギャップの捉え方
3. ISLA研究の新しい方向性

ISLA研究と実践について考える

- ① ISLA研究の知見はどう実践に役立つか
- ② 研究と実践のギャップ
- ③ 研究と実践を繋ぐために

ISLA研究の知見はどう実践に役立つかーきっかけは?



- 1. 執筆中：**「ISLA研究の成果のうち、何が日本語教育に関連して、有益な知見になるか」という視点でまとめた
- 2. 出版後：**小中高大の英語教員と対話する機会が増えた
- 3. 現在：**ISLA研究が役立つという実感とともに、実践へのインパクトの限界も痛感

ISLA研究は、どこまでカバーするのか？

第1部 言語知識とスキルの指導法

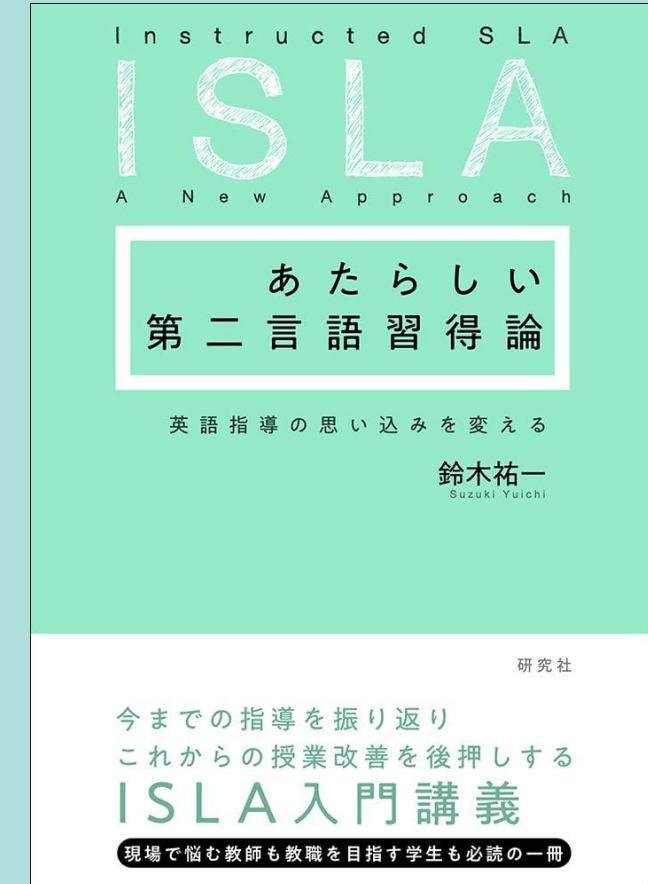
- 第1章 文法指導：学びのプロセスからどう教えるかを考える
- 第2章 語彙指導：優先順位を決めバランスを取る
- 第3章 発音・語用論指導

第2部 学習者中心のアプローチにおける教師の役割

- 第4章 インタラクションと協同学習
- 第5章 訂正フィードバック：学習者を起点に支援しよう
- 第6章 認知・非認知能力の個人差：個別最適化しよう
- 第7章 学習者心理の個人差：動機づけを多面的に理解しよう

第3部 SLA 研究に基づく指導法とカリキュラム設計

- 第8章 言語形式重視の指導法：「練習」で学びながら使う
- 第9章 意味重視の指導法：「タスク」で使いながら学ぶ
- 第10章 学習開始年齢と指導法



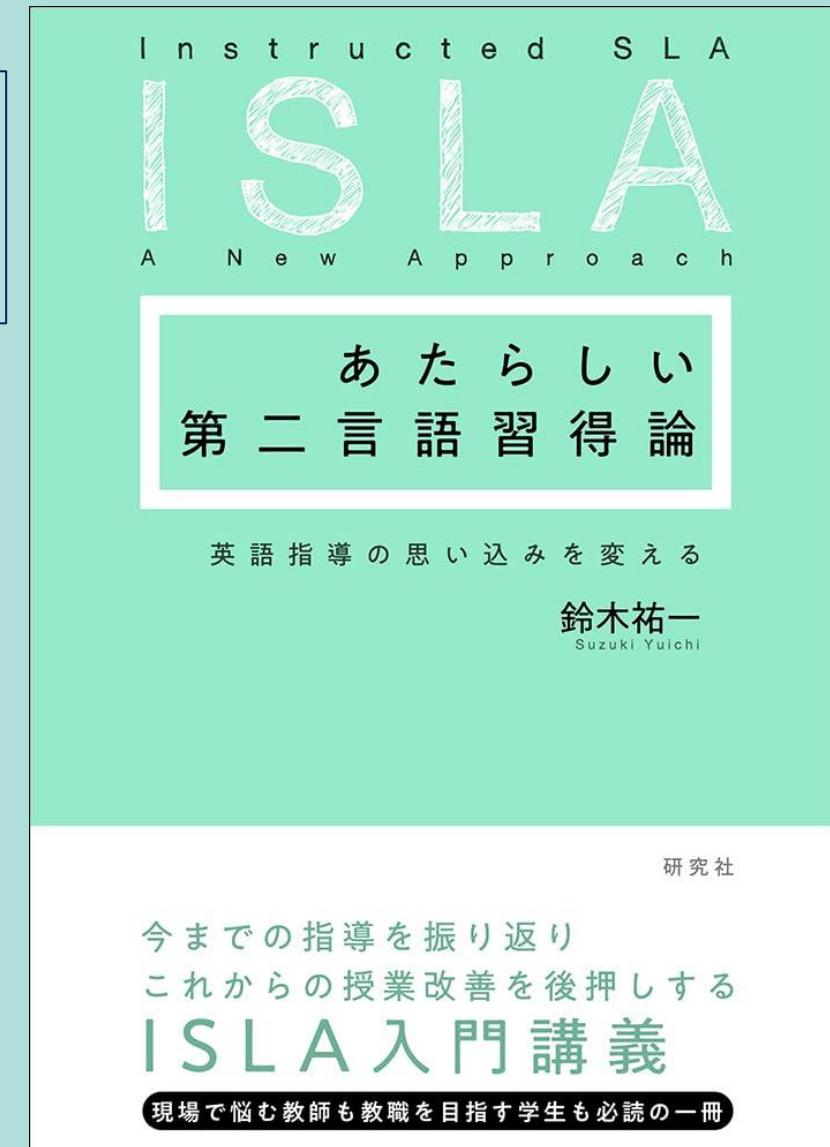
本講演の起点

第1部 言語知識とスキルの指導法

第2部 学習者中心のアプローチにおける教師の役割

第3部 SLA 研究に基づく指導法とカリキュラム設計

- ISLA研究の知見は、どういう形で実践に役立つか？

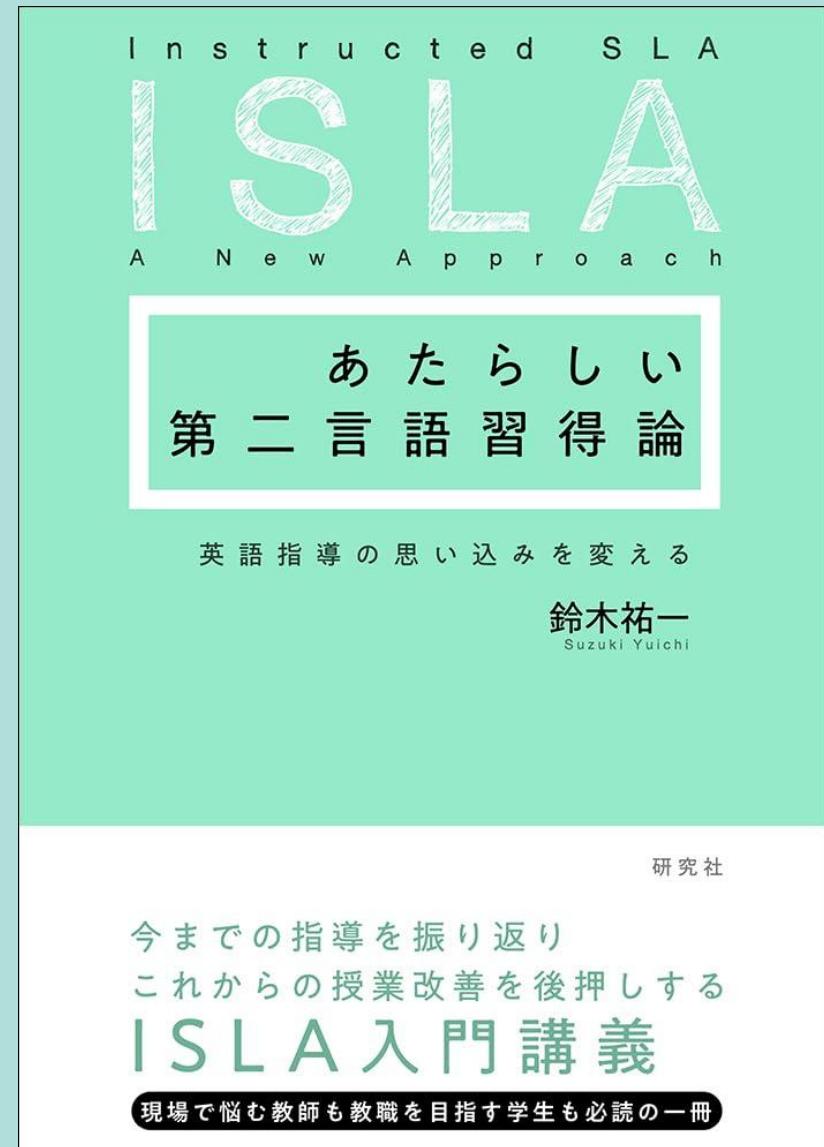


ISLA研究の知見を授業に活かす視点

第1部 言語知識とスキルの指導法

- 第1章 文法指導：学びのプロセスからどう教えるかを考える
- 第2章 語彙指導：優先順位を決めバランスを取る
- 第3章 発音・語用論指導

研究の「具体」から、「抽象度」を
上げた視点で見てみる。



ISLA研究の知見を授業に活かす視点

第1章 文法指導

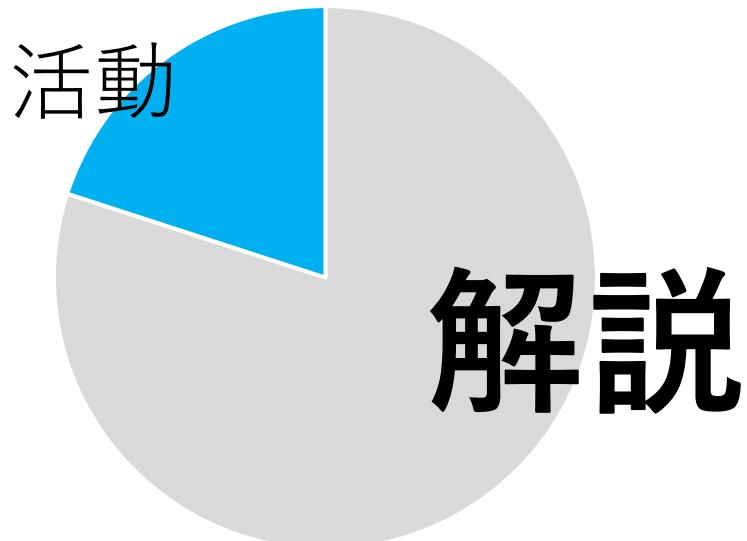
1. 文法を身につけるとはどういうことか？
2. 文法を教えたはずなのに使えないのはなぜか？
3. 明示的指導に効果はあるか？
4. 文法指導はいつ行うべきか

インプット・アウトプット仮説
明示的学習と暗示的学習
文法指導のタイミング
文法指導と文脈との統合
→文法は「使う」ことで身につく
明示的指導の取捨選択

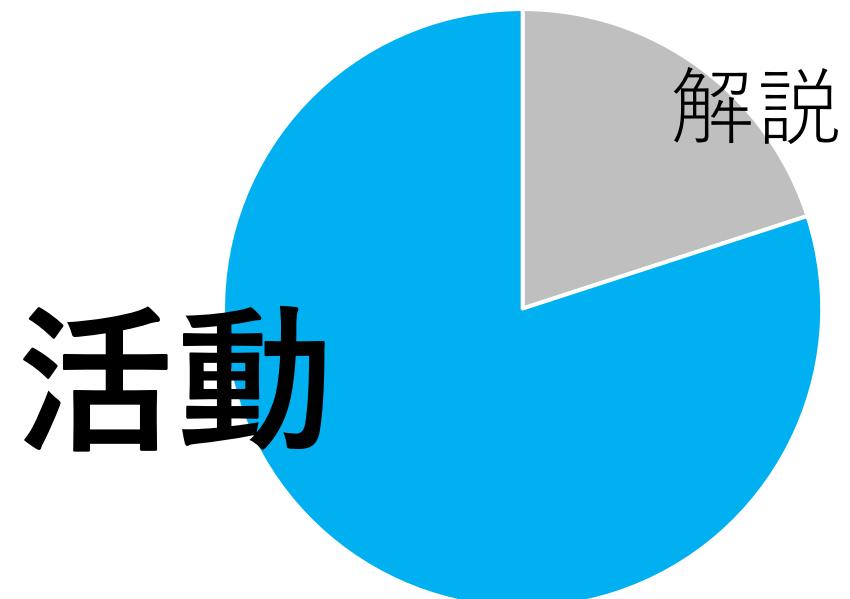
ISLA研究から考える、文法指導における優先順位は？

「解説」より「活動」を多くする

「解説」中心の文法指導
(50分授業)



「活動」中心の文法指導
(50分授業)



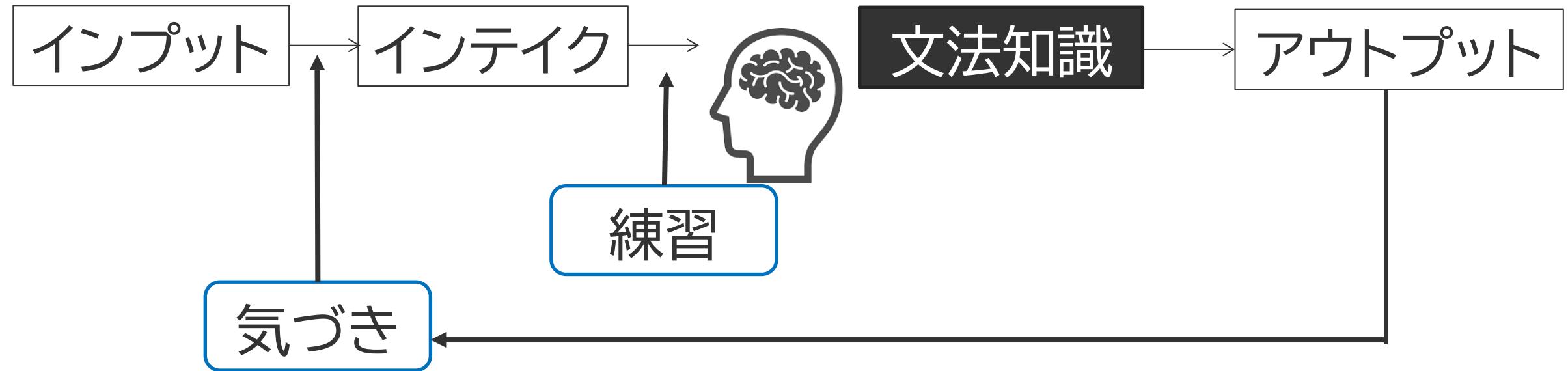
文法を使えるようになるために必要な「活動」とは？

ISLAの三大要素

1. インプット(インタラクション)
2. アウトプット
3. 練習

※必ずしも「文法」だけを意識しているわけではない

まとめ：第二言語習得の認知プロセスへの解像度を高める



インプット

文法習得の始まり

- ・ 内容を理解できる
- ・ 興味・関心を引く
- ・ 文脈がある

練習

知識を定着させる

- ・ 使える知識に変える
- ・ 自信をつける

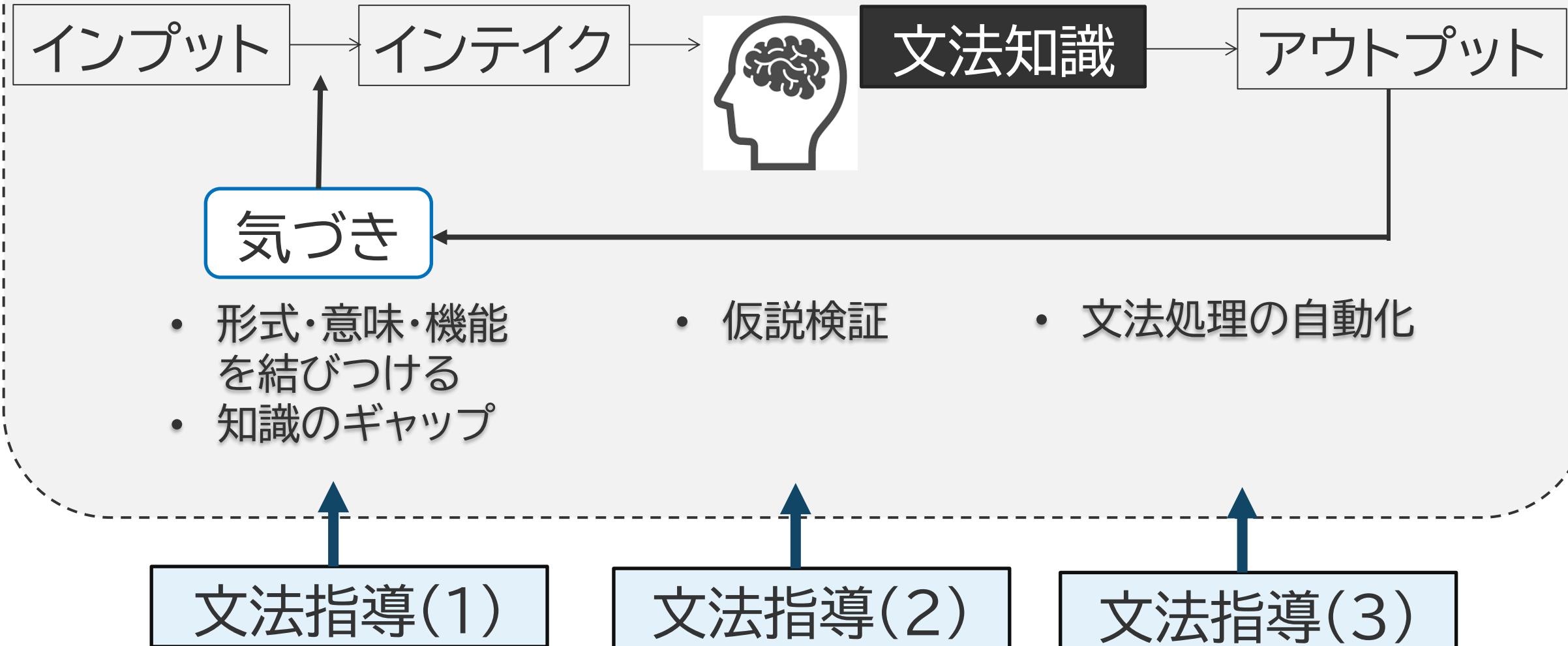
アウトプット

学習の結果ではなく、学びの過程そのもの

- ・ 気づきを促す
- ・ 仮説検証
- ・ 自動化

文法指導を位置づけると・・・

文脈のある中で、内容を常に意識させながら・・・



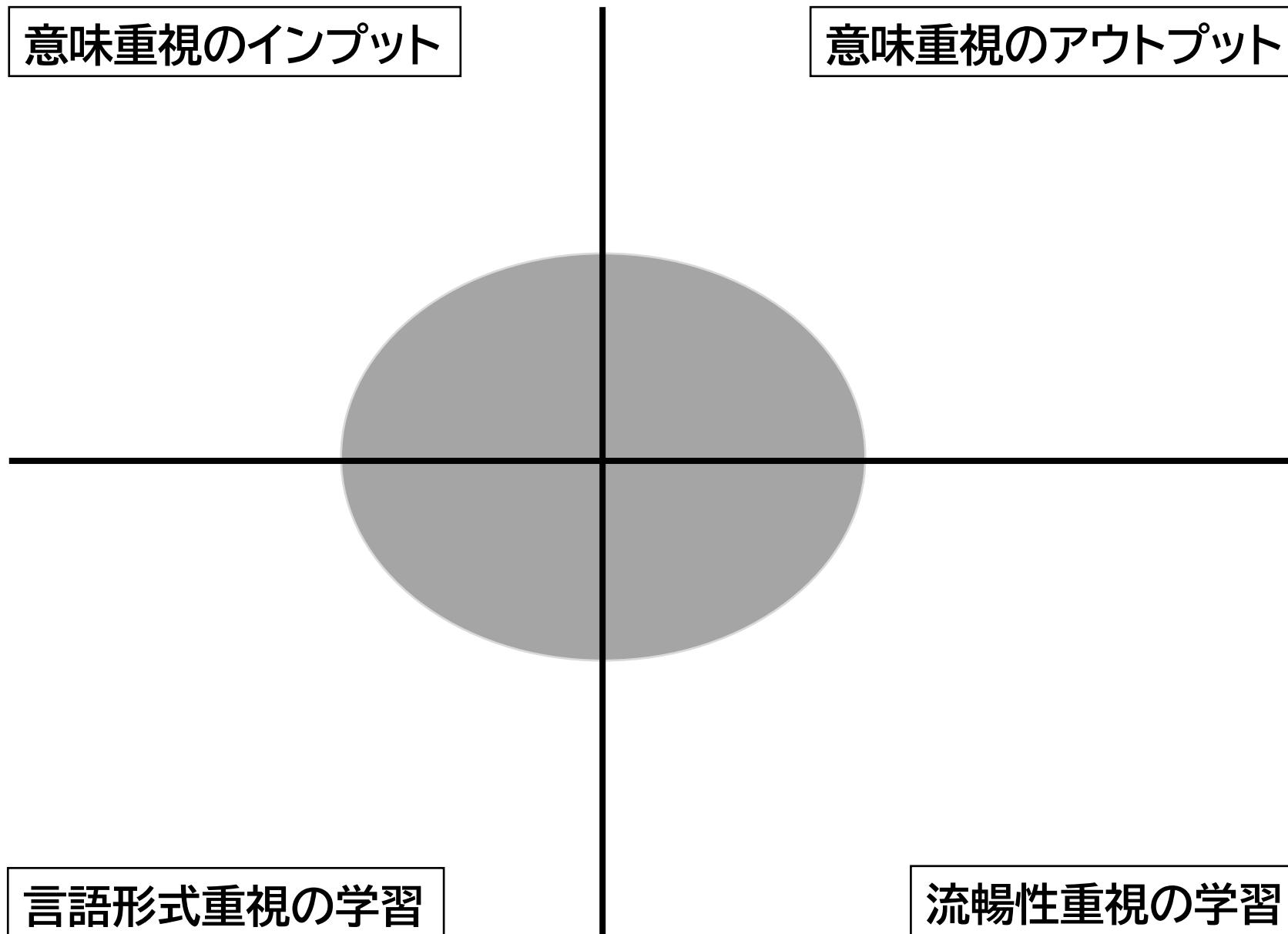
ISLA研究の知見を授業に活かす視点

第2章 語彙指導

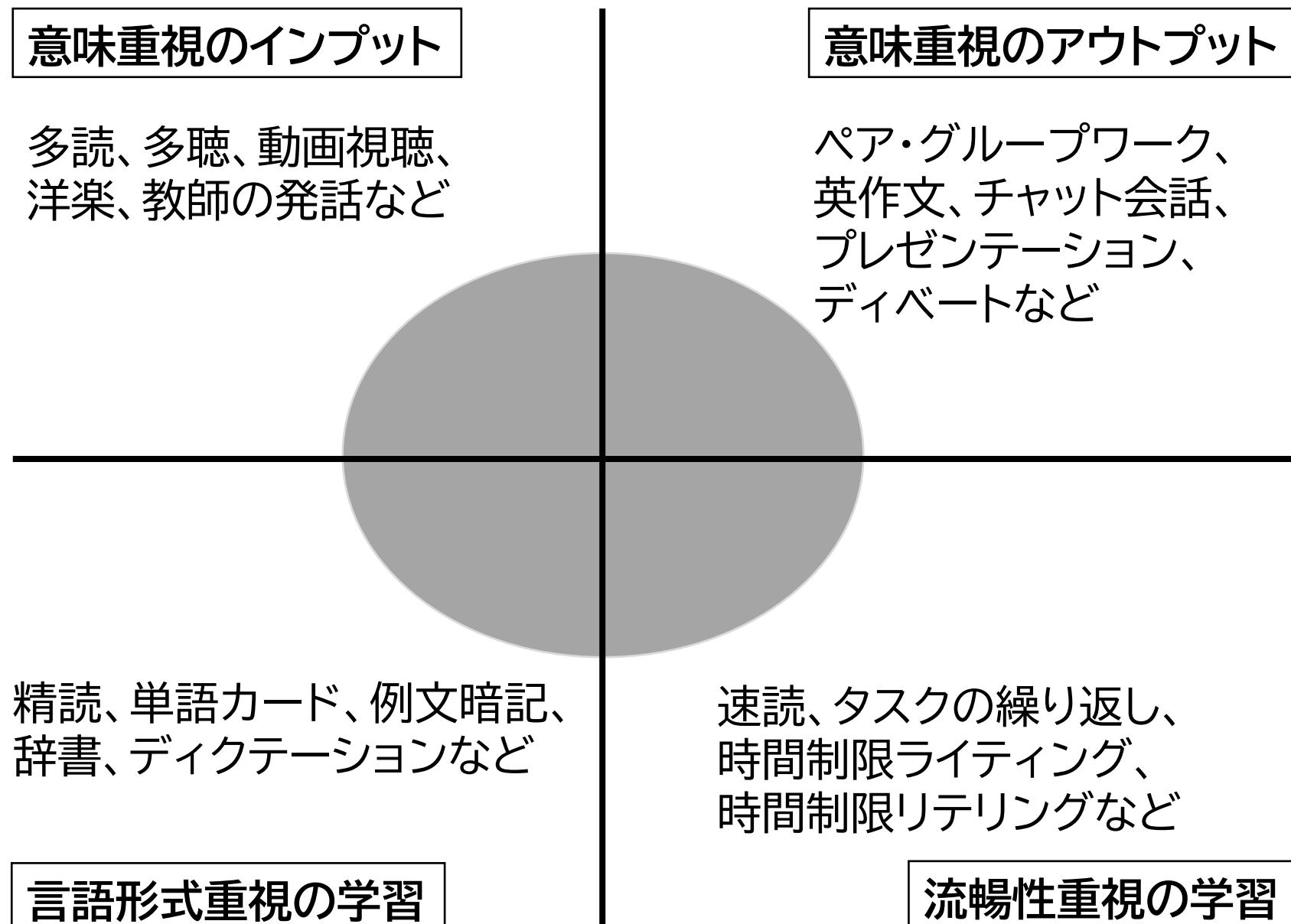
1. 語彙を身につけるとはどういうことか？
2. 用法基盤モデルから見た定型表現の重要性
3. 語彙学習のバランスと組み合わせ方
—語彙指導の優先順位とは？
4. 意図的学習の効果を高める方法
5. 偶発的学習の効果を高める方法

偶発的学習・意図的学習
Paul Nationの4ストランド
単語テストの工夫
→活動のバランスを取ろう

意図的学習と偶発的学習のバランス



意図的学習と偶発的学習のバランス



4ストランドの原理

意味重視のインプット

意味重視のアウトプット



活動をバランスよく配分するだけでなく、
4つのストランドを有機的に結びつける

4ストランドを編み込むイメージ

言語形式重視の学習

流暢性重視の学習

ISLA研究の知見を授業に活かす視点

第3章 発音・語用論指導

1. 国際共通語としての英語の視点から教える
2. 発音指導の目標・音声モデル・指導アプローチ・教える人は？
3. 発音指導の優先順位とは？
4. 形式重視と意味重視の発音指導
5. 語用論指導は後回しで構わないか？
6. 語用論指導を効果的にするためのポイント

発音の訛り・明瞭性
理解しやすい発音
インプット・アウトプット
明示的指導
→指導の目標・指導効果に対する考え方、優先順位の付け方

ホール：シンポジウム1
「教員のための音声指導と評価」

内田 洋子（青山学院大学）/ 杉本 淳子（聖心女子大学）/ 常本 亜希（東北大学）/ 大和 知史（関西大学）

到達目標やモデルは？

表 3.1 従来の発音指導とこれからの発音指導の考え方

	従来の発音指導	これからの発音指導
到達目標	ネイティブスピーカーの発音	明瞭性・理解性の高い発音
音声モデル	ネイティブスピーカーの発音	モデルは複数あっていい
指導アプローチ	訛りを減らす発音矯正のための指導で、すべての音素を同じように教える	明瞭性・理解性を高めるための指導で、音素に加えて、プロソディや流暢さも重視する
教える人	ネイティブスピーカー教師	指導技術を持つ教師

1. 学習者の習得プロセスや発達段階の見方を得る
2. 指導の優先順位をつける
3. 現実的な指導目標を設定する
4. 授業設計の指針を与える

ISLA ≠ 指導手順

ISLA = 指導原理への示唆

今までの指導の「**思い込み・当たり前**」を見直し、
新しい視座を得ることができる

英語を教えるときの 思い込みを探る

「13の問い合わせ」で振り返る

本書を読み始める皆さんへ

ISLA研究を学ぶ最大の意義は、自身の英語指導経験を振り返り学習観を揺さぶり、考え方を直し、確かめることにあります。本書は、教育の視点から、ISLA研究の知見を紹介しています。しかし、英境は地域や校種によって大きく異なります。だからこそ、自身の教業や、教わった経験と関連づけながら、本書を読み進め、省察して欲し

ISLA研究の理論と実践経験を結びつけ、一人ひとりの「実践知げるための一助として、英語指導・学習に対する価値観や思い込みチェック問題を用意しました。ぜひ、本書を読み始める前に、こに答えてみてください。



「思い込み」を見直すためには？

英語指導・学習観を振り返る

SLA研究を通して 「13の問い合わせ」を振り返る

あなたの英語指導・学習観は揺さぶられたか？

本書を読み終えた皆さんへ

序章で、皆さんには「英語を教えるときの「思い込み」を振り返るための13の問い合わせ」に答えていただきました。本書を通して学んだSLA研究の知見を踏まえ、今一度、同じ質問に向き合ってみてください。そして、自身の英語指導を新たな視点から捉え直してみましょう。

英語を教えるときの「思い込み」を振り返るための 13 の問い合わせ

次の項目に対して、どれくらい同意するか○をつけてください。

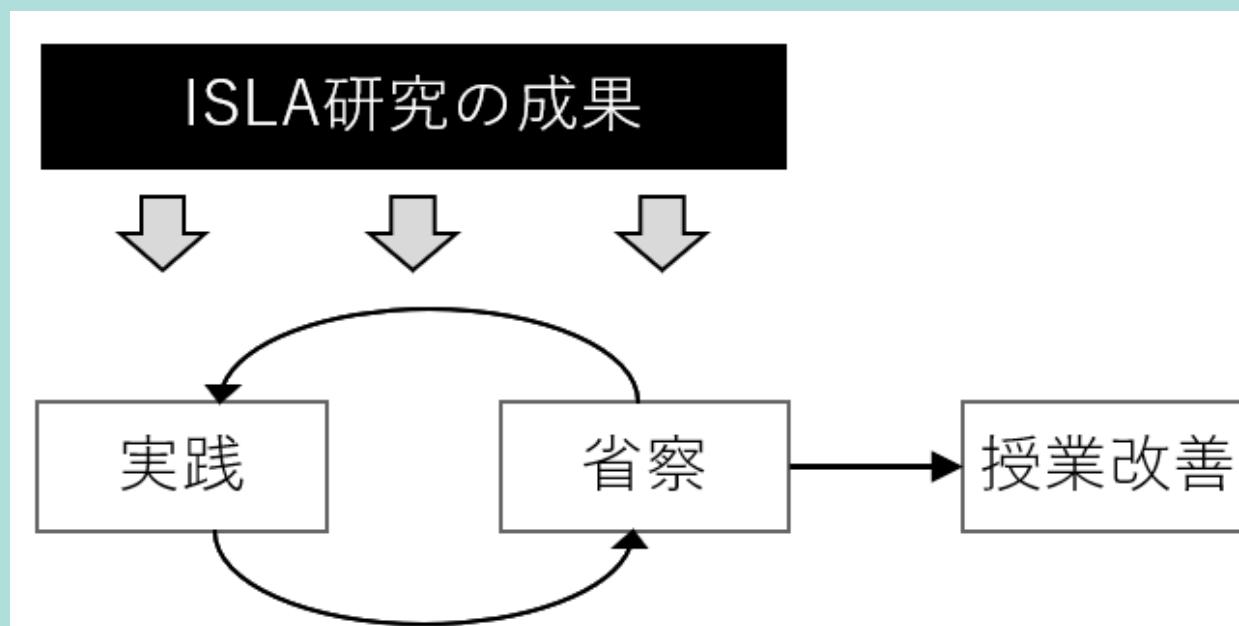
A 全く同意しない B 同意しない C 同意する D 強く同意する

1. 文法は分かりやすく教えることで身につく。	A B C D
2. 単語リストによる暗記学習は効率的である。	A B C D
3. 英語の発音は通じればいい。	A B C D
4. 相手にどう伝えるかを学ぶことは、語彙・文法学習よりも優先度が低い。	A B C D
5. ペア・グループ学習では、間違った英語が身についてしまう。	A B C D
6. 生徒が話すときは間違いを訂正すべきだ。	A B C D
7. 生徒の英作文の間違いはすべて訂正すべきだ。	A B C D
8. 外国語学習の才能がない人は、英語学習に成功できない。	A B C D
9. 生徒をやる気にさせる教え方は存在する。	A B C D
10. 繰り返し練習はコミュニケーション能力の育成に役立たない。	A B C D
11. 正確さよりもまず使ってみることを重視すべきだ。	A B C D
12. 英語学習の開始は早いほど成功できる。	A B C D
13. 優れた英語教師になるために、SLA 研究の成果が役立つ。	A B C D

第1部まとめ ISLA研究の知見はどう役立つか？

ISLA研究の成果を活用しながら「振り返る」ことができる

1. 指導の「思い込み」に気づき、新しい考え方を得る
2. 授業改善を後押し
3. 教師の専門性を高める



ISLA研究と実践について考える

- ① ISLA研究の知見はどう実践に役立つか
- ② 研究と実践のギャップ
- ③ 研究と実践を繋ぐために

「研究と実践のギャップ」をSLA研究の歴史的発展から考える

第2部 学習者中心のアプローチにおける教師の役割

第4章 インタラクションと協同学習

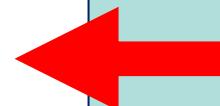
第5章 訂正フィードバック：学習者を起点に支援しよう

第6章 認知・非認知能力の個人差：個別最適化しよう

第7章 学習者心理の個人差：動機づけを多面的に理解しよう

ISLA研究と実践について考える

- ① ISLA研究の知見はどう実践に役立つか
- ② 研究と実践のギャップ
- ③ 研究と実践を繋ぐために



(I)SLA研究と教育「実践」にギャップが生まれるのはなぜか？

言語教育・習得は複雑で多層性の中に埋め込まれた営みであるから。

注意点

- ※ 今回は『あたらしい第二言語習得論』の第2部で直接見せていない、SLA研究の歴史的な展開から考える
- ※ 「英語教育研究」については今回は範囲外

SLA研究史における2つの大きな変化

- **Social Turn (1990年代後半~)** : パラダイムの多様化 (e.g., Firth & Wagner, 1997; Block, 2003; Ortega, 2005)
- **Methodological Turn (2000年代~)** : 研究手法の発達と厳密化 (e.g., Mackey & Gass, 2005; Byrnes, 2013; Plonsky, 2024)

SLA研究史における2つの大きな変化

- **Social Turn (1990年代後半~)** : パラダイムの多様化 (e.g., Firth & Wagner, 1997; Block, 2003; Ortega, 2005)
- **Methodological Turn (2000年代~)** : 研究手法の発達と厳密化 (e.g., Mackey & Gass, 2005; Byrnes, 2013; Plonsky, 2024)

Social Turn (1990年代後半~)

鈴木(2024, 4章 インタラクションと協働学習　冒頭)

1. インタラクションが第二言語習得の鍵を握る理由とは？

インタラクション（コミュニケーションの中で起こる話し手と聞き手の相互交流）は、次の2つの観点から第二言語習得に重要だと考えられています。

- ・認知的アプローチ：学習者個人の頭の中で起こる言語習得プロセスを促す
- ・社会文化的アプローチ：学習者同士が意味を共同で構築しながら学ぶプロセスを促す

これら2つの視点から、インタラクションを通した学習者中心の学びの実践について考えていきます。

なぜインタラクションが英語習得に繋がるか? (e.g., Long, Lyster)

表 4.1 認知的アプローチから見たインタラクションの効果

インプット効果	アウトプット効果
<ul style="list-style-type: none">意味交渉・リキャストを通して、理解できるインプットが増える理解したインプットの中にある新しい言語形式へ注意を向け、気づきが起こる	<ul style="list-style-type: none">訂正フィードバックを受けることで、自分の使った言語形式が正しかったかどうか仮説検証できるやりとりの過程で、自分の発話を言い直す機会がある



社会文化的アプローチからインタラクションを見ると (e.g., Lantolf)

表 4.2 社会文化的な観点から見たインタラクションの効果

概念	インタラクションへの効果
発達の最近接領域	学習者は、自力では到達できない言語能力も、他者の助けを借りることで習得可能になる
足場かけ	教師や仲間からの助け（足場かけ）により、学習者は徐々に自立した言語使用ができるようになる
ランゲージング	仲間と一緒に問題解決をするために、考えたことを言語化し共有しながら、言語面での正確さを高めることができる
協同対話	他者との対話によって、新しい言語表現に関する知識などを一緒に作り上げることができる

- 学習者同士が助け合いながら、協働対話を行うことで、言語習得が進む点を強調
- 研究の焦点の拡張
→ペア・グループ活動における学習者の関係性や学習環境に着目

認知的アプローチから拡張したISLA研究領域

- ・ **インタラクション研究**：認知的プロセスだけでなく、学習者同士の社会的な関係性にも着目（社会文化理論）
- ・ **非認知能力の役割**：言語適性だけでなく、マインドセットやL2 Gritのような非認知能力も重要
- ・ **感情の役割**：動機づけ→感情、アイデンティティ、エンゲージメントも重要な要因

SLA研究の歴史：Social Turn が意味したものとは？

SLA研究のさらなる学際化と、エピステモロジーの多様化

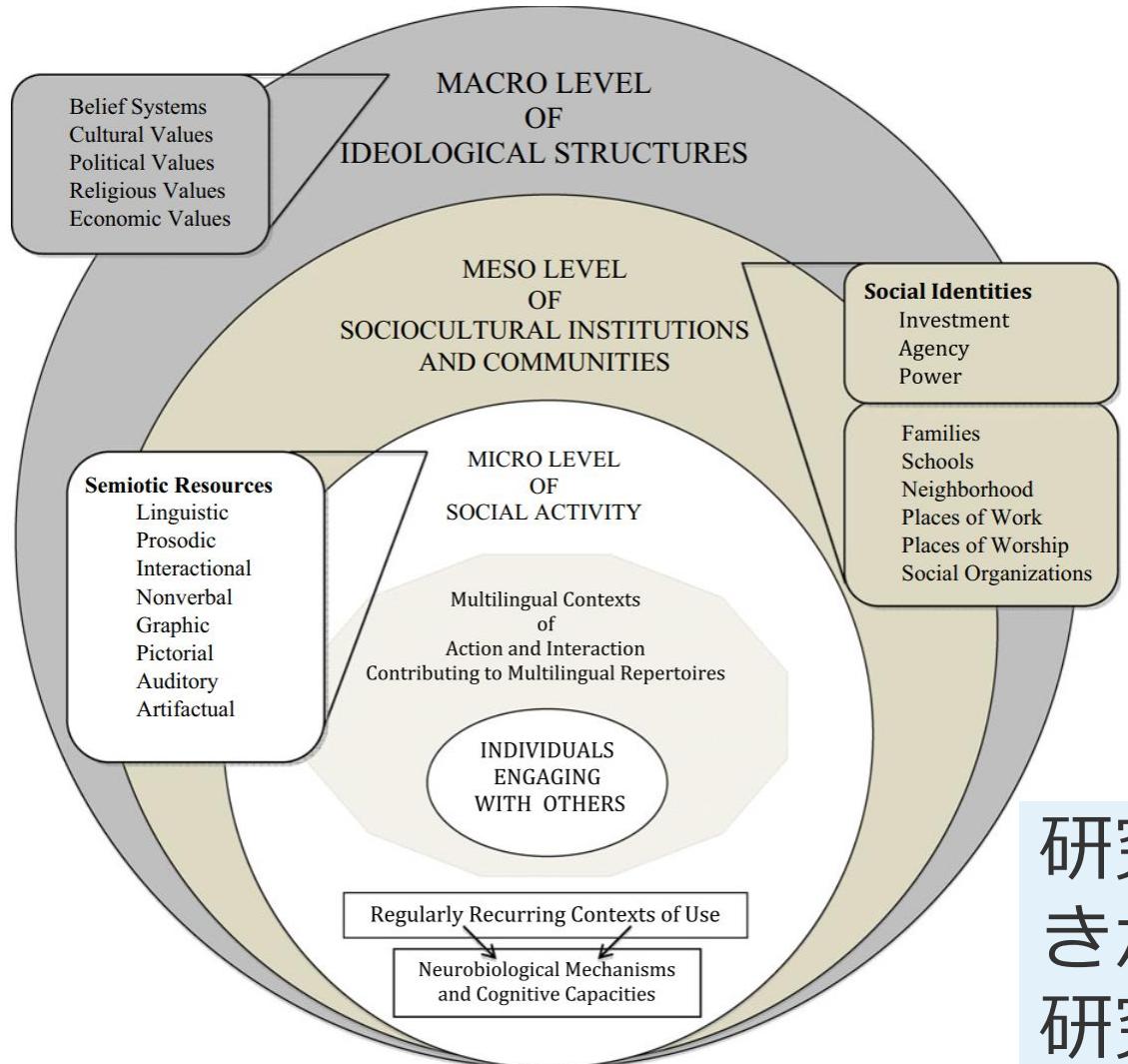
- 他領域からの影響：理論言語学、心理言語学、心理学、人類学、神経科学、社会言語学、批判理論
- エピステモロジー（認識論）、知識の捉え方の多様化
 - 外国語教育・習得の奥深さ
 - 「専門知識→実践」のようなシンプルな因果関係を想定しにくい
- この「答えが一つではない」複雑な現実に対応しようとするのが研究者と実践者の共通の仕事

Social turnのその後・・・

- SLA理論は、少なくとも60以上ある(Long, 2007)。
- より多くの研究者に取り入れられる理論もあるが、すべてが淘汰されて、一握りの理論に集約されにくいだろう (e.g., Ellis, 1997, 2008; Ortega, 2005; Lantolf, 1996)。
- メタ理論の提案
 - 複雑系理論(complexity theory, Larsen-Freeman, 2008)
 - 単一の理論より、超学際性 (transdisciplinarity) を打ち出した生態学的なフレームワーク (The Douglas Fir Group, 2016)

言語教育/学習の「多層性」 (The Douglas Fir Group, 2016)

The Multifaceted Nature of Language Learning and Teaching



③マクロ：イデオロギー：

(例) 政治・経済的価値観

②メソ：(例) 社会文化制度・

コミュニティ

① ミクロ：(例) 個人の認知・

情動能力の動員

研究者が一方的に「言語教師に何をすべきか『伝える』」のではなく、「教師と研究者のより協力的な関係を築く」べき (DFG, 2016)

第2部まとめ なぜ研究と実践にはギャップが起こるのか？

「あららしい」第二言語習得研究の展開

言語教育・習得は複雑で多層性の中に埋め込まれた営みである。

- 多様なSLA理論・認識論が示す「複雑性・多層性」は、「専門知識→実践」のように直接的な応用は難しいことを示す。
- 「認知的アプローチの研究」から導きだそうろする「普遍性」は、単純にあらゆる社会教育環境に当てはめられるとは限らない。
- 「答えが一つではない」複雑な現実を、複眼的に捉えて対応するのが、研究者と実践者の共通の仕事
→教師と研究者の協力的な関係を築くことが大切

ISLA研究と実践について考える

- ① ISLA研究の知見はどう実践に役立つか
- ② 研究と実践のギャップ
- ③ 研究と実践を繋ぐために

ISLA研究の知見を授業に活かす視点

第3部 SLA 研究に基づく指導法とカリキュラム設計

第8章 言語形式重視の指導法：「練習」で学びながら使う

第9章 意味重視の指導法：「タスク」で使いながら学ぶ

第10章 学習開始年齢と指導法

【補章】研究と実践の対話 ※コンパニオンサイト

ISLA研究と実践について考える

- ① ISLA研究の知見はどう実践に役立つか
- ② 研究と実践のギャップ
- ③ 研究と実践を繋ぐために



補章とその後について

補 章

研究と実践の対話

ISLA の知見を授業に活かす

ISLA 研究の目的は、指導の効果を検証し、言語教育に活かせる知見を積み重ねていくことです。しかし、研究と教育実践の間には大きなギャップがあることが指摘されています。そこで、本書『あたらしい第二言語習得論——英語指導の思い込みを変える』の補章として、ここでは ISLA 研究と実践の関係について、今までの歴史的な流れを踏まえ、これからの方針を議論します。そして、本書で取り上げた ISLA 研究のテーマを再確認しながら、研究成果を実際の教育現場でどのように活用できるかを探ります。

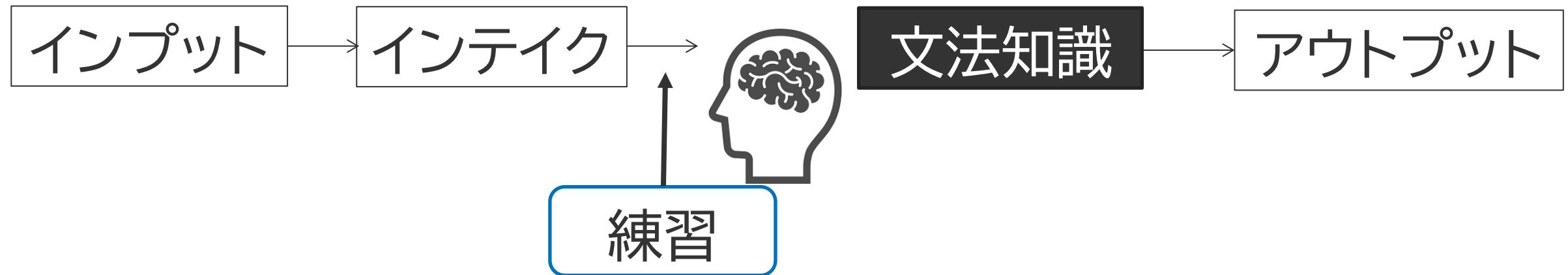
Keywords

研究と実践のギャップ、研究と実践の対話、一般化、特殊性、実験室研究、教室研究、生態学的妥当性、研究のオープン化、実践者研究、エピステモロジーの多様化、「思い込み」と「当たり前」

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）の前に

1. 鈴木が今まで行なってきたISLA研究
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.

再掲：「ん、練習？？」



インプット

文法習得の始まり

- ・内容を理解できる
- ・興味・関心を引く
- ・文脈がある

練習

(Practice)

知識を定着させる

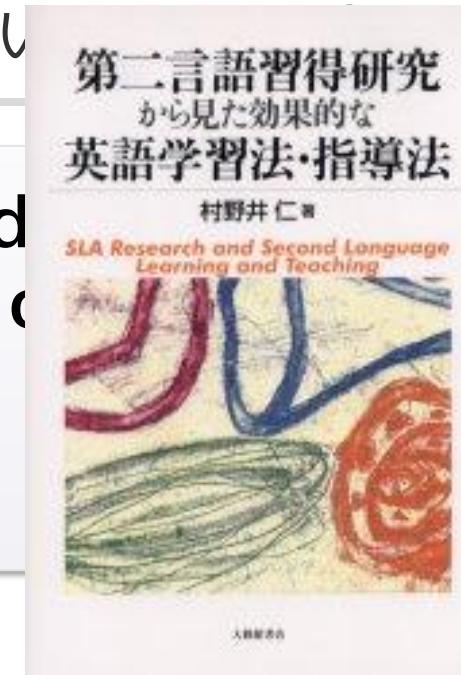
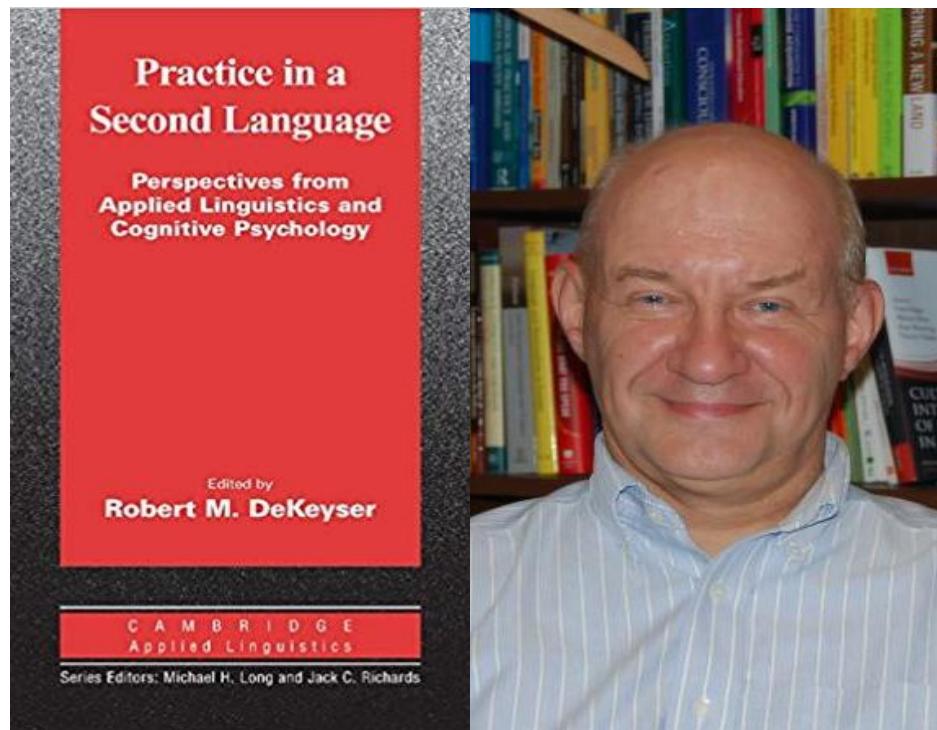
- ・使える知識に変える
- ・自信をつける

アウトプット

学習の結果ではなく、学びの過程そのもの

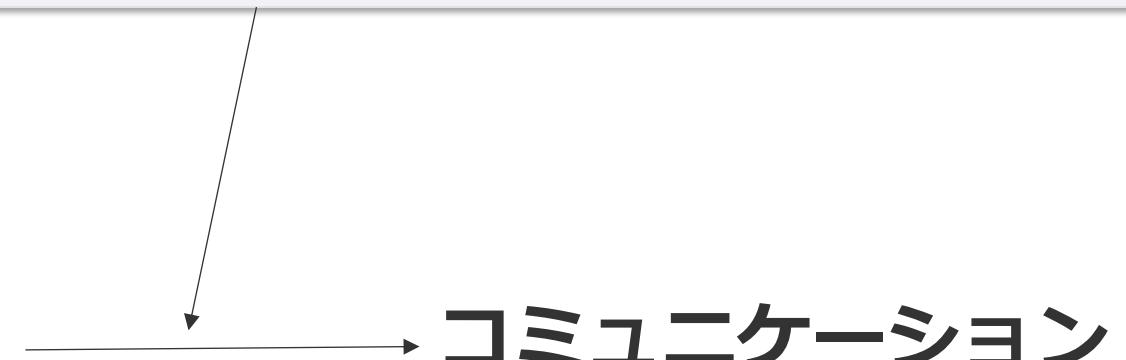
- ・気づきを促す
- ・仮説検証
- ・自動化

Practice is “specific activities in the second language, systematically, deliberately, with the goal of acquiring knowledge and skills in the second language”



音読、シャドーイング、ダイアローグ暗唱
スキット、リテリング、要約活動 など

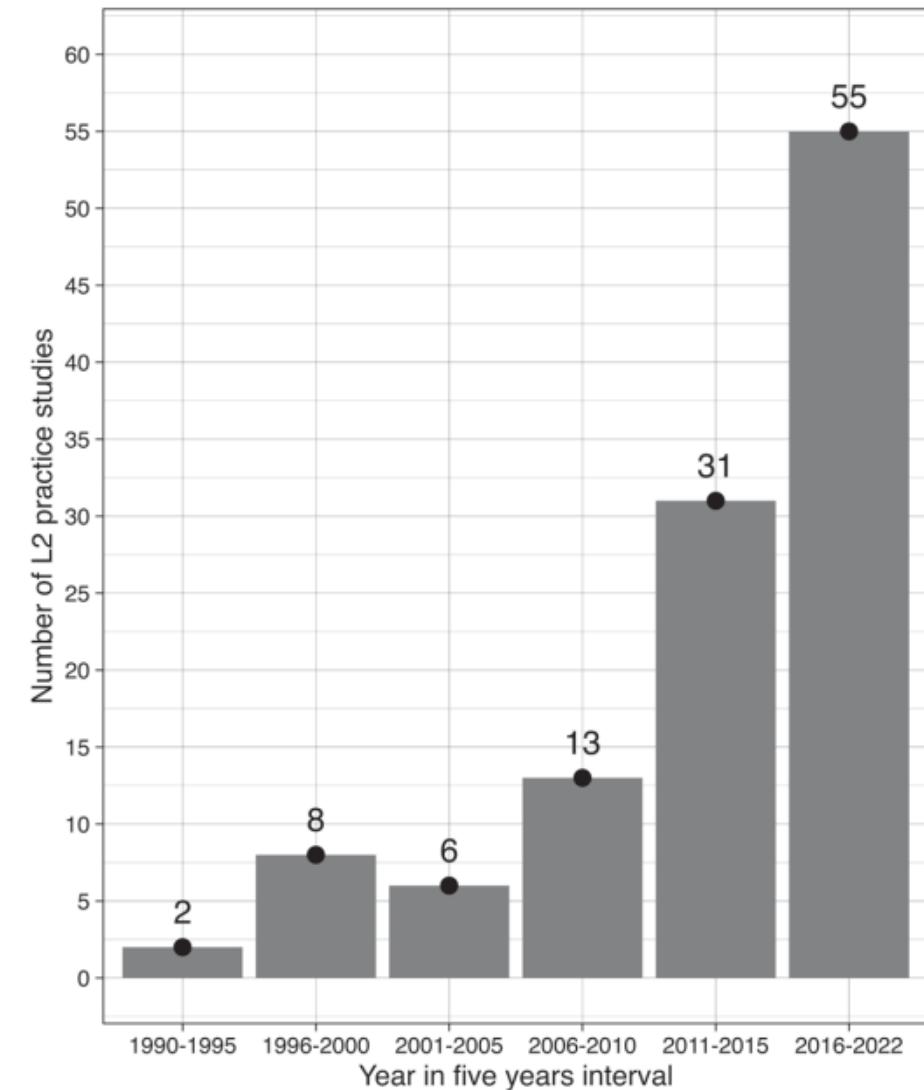
機械的
ドリル



Maie & Godfroid (2023)

After DeKeyser's (2007) publication,
"the exponential growth of L2 practice
research"

- 研究で対象となった「練習」活動の9割以上が、意味重視・コミュニケーションの練習（※1割のみ、機械的ドリル）
- ラボ研究と教室研究が約50%ずつ



プラクティス研究って、実践にどう繋がるの？

1. 「練習」の理論的な定義

- ✓ TBLTの「タスク」、学習指導要領の「言語活動」と、どう違う？

2. 「練習」の効果検証

- ✓ 自動化を促進する方法、最適な復習スケジュール、必要十分な練習量は？

3. 指導法への示唆

- ✓ Presentation-Practice-Production (PPP) における「練習の役割」は？

- ✓ TBLTのTask repetitionやtask planningのメカニズム・役割は？

ESL基準で行われてきたISLA研究では、EFL環境下におけるプラクティス研究はまだ未開拓。見落とされている重要な研究テーマが多い。

プラクティスの新しい展開

2019年

Suzuki, Nakata,
DeKeyser

The
Modern Language
Journal

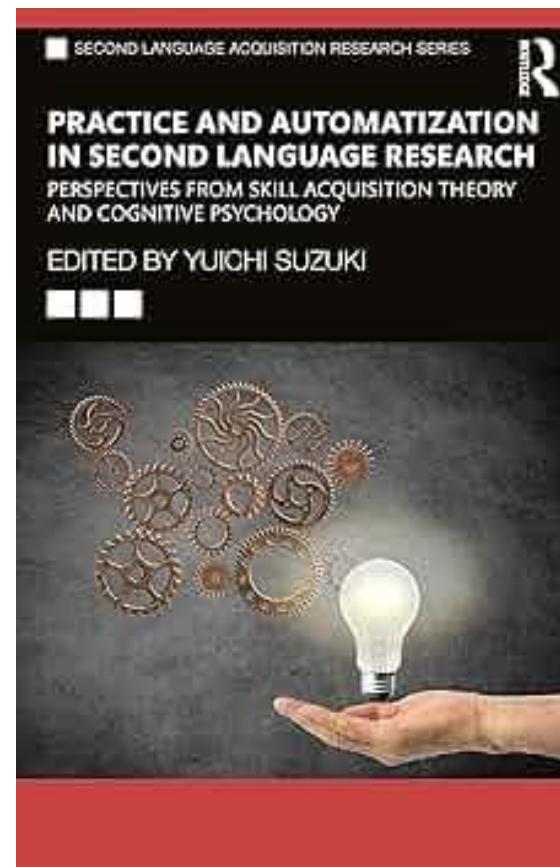
Volume 103 • Number 3 • Fall 2019

*Devoted to research and discussion about the learning
and teaching of foreign and second languages*



2023年

Suzuki



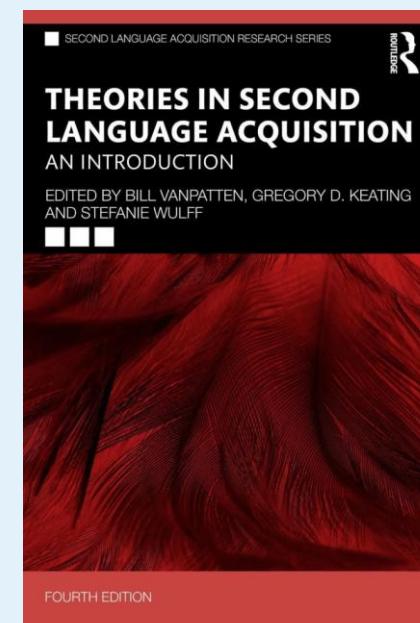
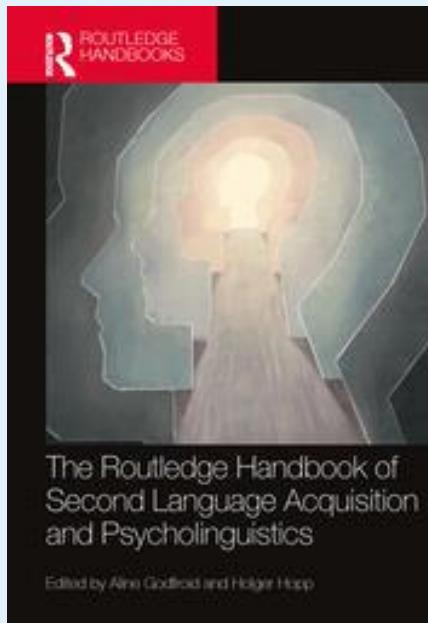
16名の研究者による
コラボレーションの成果

日本、アメリカ、チリ、中国、英
国、ドイツ、オーストラリア、
ニュージーランド

Part① プラクティスの理論
Part② 様々な教育場面での応用
Part③ 研究手法のレビュー

具体的な研究、そしてこれからの新しい研究テーマの方向性については

- Suzuki, Y., & DeKeyser, R. M. (in press). Knowledge and skill in ISLA. In S. Loewen & M. Sato (Eds.), *The Routledge Handbook of Instructed Second Language Acquisition* (2nd ed.).
- DeKeyser, R. M., & Suzuki, Y. (2025). Skill acquisition theory. In B. VanPatten, G. D. Keating, & S. Wulff (Eds.), *Theories in second language acquisition: An introduction*. (4th ed.)
- Suzuki, Y. (2022). Automatization and practice. In A. Godfroid & H. Hopp (Eds.), *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition and Psycholinguistics*.



研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

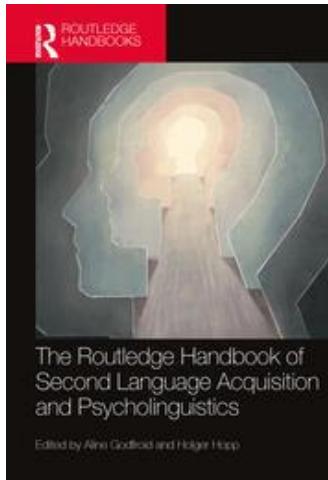
0. 「基礎研究」も実践との繋がりを意識する

1. 実践との繋がりをしっかりと意識すれば、指導効果検証や学習メカニズム解明も大きな貢献になる可能性がある。
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.

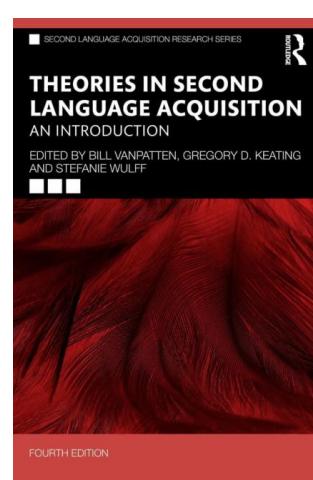
研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

0. 当たり前のことですが・・・
1. 出版された研究やレビュー・チャプターを読むのは、（一部の限られた）研究者だけ。
- 2.

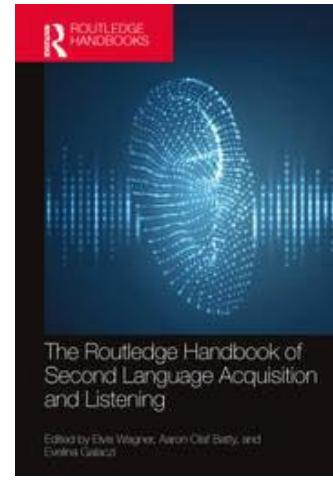
3.



4.



5.



研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

- 1.
- 2.
- 3.
- 4.
- 5.



研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する



研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する



外国語教師はどれだけ研究を読んでいるか？

Marsden & Kasprowicz (2017)

- 英国の語学教師約600名を対象とした調査において、(SSCI採録)研究論文を読んだりすることはほとんどない



研究成果へのアクセス障壁とオープン化の試み

1. 研究成果へのアクセスに関する問題点

- 専門用語が多用されており、非専門家にとって難解である。

2. 解決策：研究のオープン化 (Open Research) の推進

- この問題を解決するため、近年「研究のオープン化」を推進する動きが活発化している。
- 研究者以外の一般読者でも最新のISLA研究成果を理解できるよう、分かりやすい形で誰もがアクセスできるように提供すること。

アクセシビリティ向上のための具体的試み

事例: OASIS (Open Accessible Summaries in Language Studies)

- 研究結果を簡潔かつ平易な要約（サマリー）で提供。
- 研究コミュニティ外の人々による研究知見の理解を促進する。



Learning multiword phrases: is it better to practice before or after a speaking task?

What this research was about and why it is important

In task-based language teaching—an approach where classes use communication tasks, a key question for teachers is when to introduce new vocabulary to support these tasks. Providing vocabulary practice before a task might prepare learners for communication, but it could also turn the task into a simple vocabulary drill. Alternatively, practicing vocabulary after a task might help reinforce what learners encountered during the task. This study investigated how the timing of vocabulary practice affects not only the learning of multiword phrases but also how learners' brains work together during communication. We used a brain imaging technique to compare brain synchronization between pairs of learners who practiced multiword phrases before a communication task and pairs who practiced after. The findings showed that practicing vocabulary beforehand led to better learning of the phrases, while practicing afterward led to the learners' brains being more in sync during the communication task.

What the researchers did

- The study involved 80 Japanese-speaking university learners of English (age: 18-22 years old) with limited exposure to English in English-speaking countries. They were recruited in pairs of friends.
- Each pair worked together on two communication tasks where one learner described a sequence of events (e.g., a spy's actions) to the other, who used the information to complete a map by tracing a spy's route.
- Target lexical phrases were multiword phrases (verb-noun combinations) that are useful to narrate the events effectively, such as "fly a drone" or "release gas".
- The pairs were divided into two learning conditions: a "pre-task" group that practiced the phrases before the communication tasks, and a "post-task" group that practiced them after.
- During the tasks, the researchers used a wearable brain-scanning device (fNIRS) to measure how similarly the partners' brains were working together, a process known as inter-brain synchronization.
- The researchers tested the learners one week later to see how well they were able to use the phrases for speaking.

What the researchers found

- **Better learning with pre-task practice:** The group that practiced the vocabulary before the communication task was more accurate in using the phrases when tested a week later.
- **Better brain synchronization with post-task practice:** The group that did the communication task before practicing the vocabulary showed higher levels of brain synchronization between partners during the task. This suggests their brains were working together more closely to communicate.
- **Practice and speed:** For the group that practiced after the task, recalling more phrases in the practice session was linked to being able to produce the phrases more quickly in the phrase test.
- **Brain synchronization and learning:** Greater brain synchronization between partners was linked to better learning, suggesting that inter-brain synchronization facilitates vocabulary learning with communication tasks.

Things to consider

- A potential trade-off: Practicing vocabulary before a communication task appeared more effective if the main goal was for learners to be able to use specific phrases. In contrast, having learners do the task first seemed to promote better neural coordination during communication. Possibly, pre-teaching vocabulary might have caused learners to divide their attention between using the correct words and communicating with their partner.

1. What this study was about and why it is important

2. What the researchers did

3. What the researchers found

4. Things to consider

外国語教師はどれだけ研究に間接的に触れているか？

Marsden & Kasprowicz (2017)

- 実践家（教師）向けの専門誌において、SSCI採録論文が引用される割合は、専門誌の記事1本あたりわずか0.17%に過ぎなかった。



日本の実践向け専門誌は？

大修館書店『英語教育』

執筆者：小中高の教員、予備校講師、大学教員

テーマ：実践メインだが、研究についても特集
されている

どのような教師が、研究に間接的に
触れているのか？



2025年度の連載記事

「SLAで答える 指導の疑問」

- 3"S" (3人の鈴木) 渉・駿吾・祐一
- 1ページにつき、約1本の論文が引用



鈴木涉(宮城教育大)・鈴木駿吾 (名古屋大)

第二言語習得研究
SLAで答える
指導のギモン
リレー連載 第3回
リーディングは文章内の単語を全部知っていないとダメ?
鈴木駿吾 Suzuki Shungo
名古屋大学准教授

本連載では、第二言語習得研究 (Second Language Acquisition research: SLA) を専門とする鈴木トリオ (涉、祐一、駿吾) が、近年の研究成果をもとに指導上の疑問にお答えします。今回は、未習語を含む英文の扱い方について、2つの視点から考えてみます。

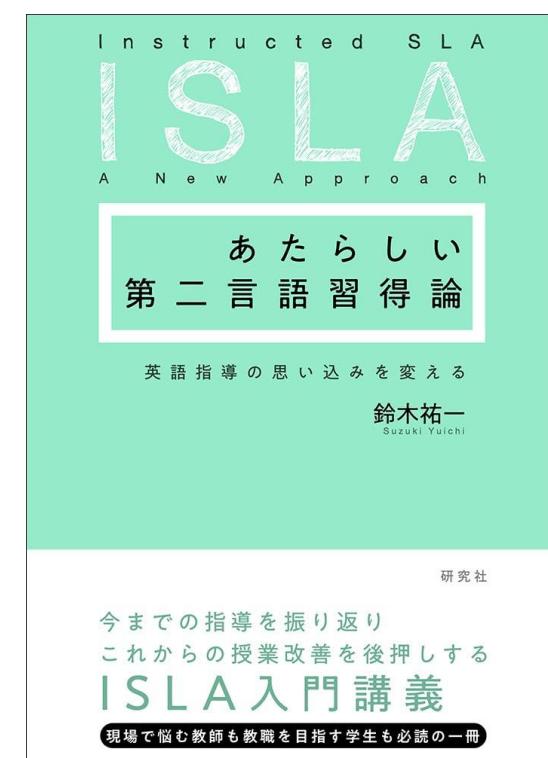
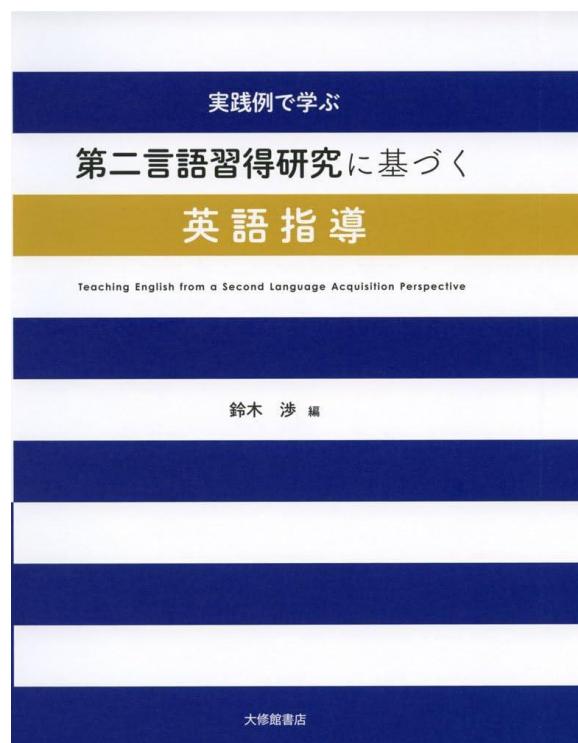
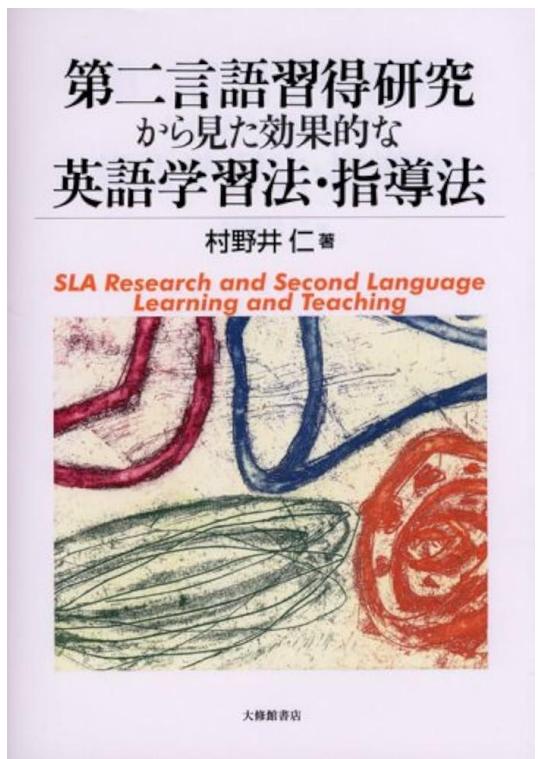
素朴なギモン
教科書以外の英文も読ませたいのですが、生徒が知らない単語が含まれているものは避けた方がよいのでしょうか?

答え
必ずしも文章内の語彙をすべて知っている必要はありません。大切なのは、「学ぶために読む

高生とは学
そこで注
よる再現研
を目指して
熟度) を対
果、既知語
は上がるも
分な読解に
明らかにな
ていれば読
彙以外にも
関係してい
しかし、
で」読む場
業内での読
なのが、“R
両視点を使
て語彙や文
後者は読む
どちらかに
み方や支援
たとえば
ような支援
Learn”型の
・読解前：
ードへの

書籍（和書）でもアプローチしている

ISLA研究の成果は、研究者・教師・学生・一般向けに書かれている

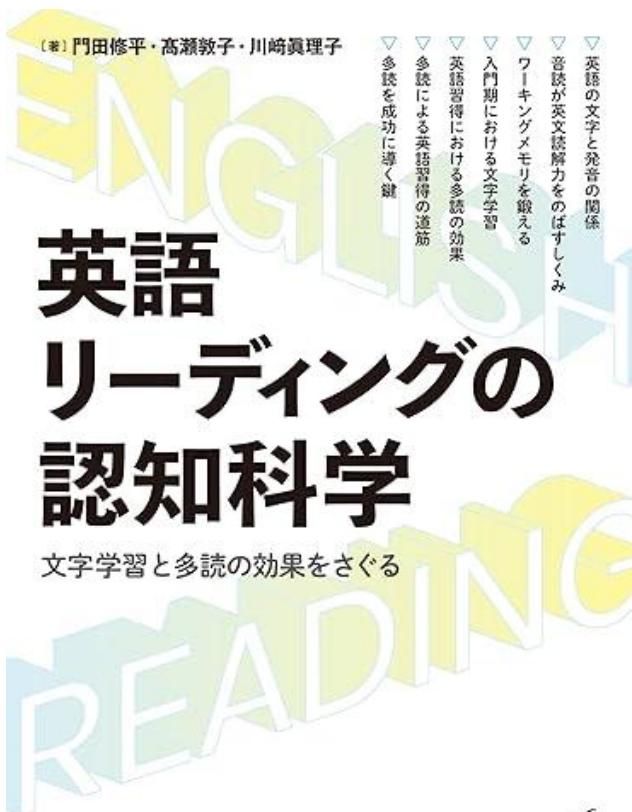


テーマを絞った読みやすい書籍も増えている

2019年



2021年



2024年



2025年



おそらく世界的に見ても最も充実している情報量

さらには・・・自分の研究について紹介してみる

中田達也（立教大学）の研究ブログ

【研究結果】単語テストを累積的にするだけで英単語学習が3倍以上促進される



tatsuyanakata

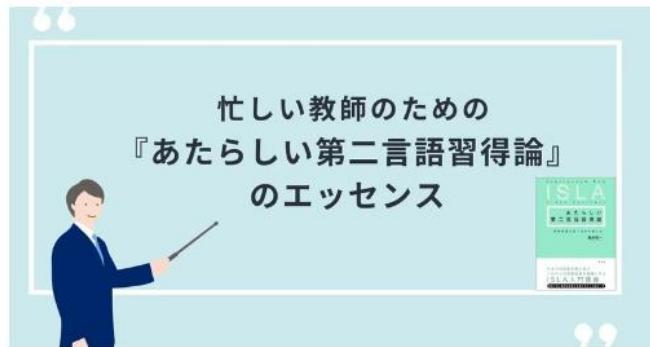
2020年6月9日

お知らせ, 研究, 英語学習法

私が執筆した以下の論文が、TESOL Quarterly (Wiley-Blackwell)に掲載されました。

Nakata, T., Tada, S., McLean, S., & Kim, Y. A. (2020). [Effects of distributed retrieval practice over a semester: Cumulative tests as a way to facilitate second language vocabulary learning](#). *TESOL Quarterly*.
doi:10.1002/tesq.596

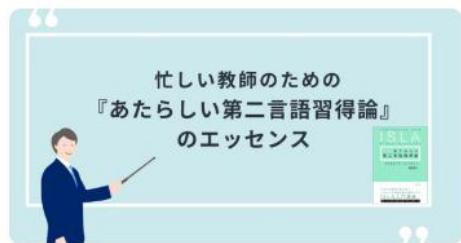
さらには・・・ブログも始めてみる



運営しているクリエイター

鈴木祐一 | 早稲田大学 国際学術院・国際教養学部

記事 月別 ハッシュタグ



忙しい教師のための『あららしい第二言語習得論』のエッセンス

皆さん、はじめまして。早稲田大学・国際教養学部の鈴木祐一です。大学では、私の専門分野である第二言語...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2か月前

47 47 ...

忙しい教師のための『あららしい第二言語習得論』のエッセンス

公開中 9本

『あららしい第二言語習得論—英語指導の思い込みを変える』(研究社)のエッセンスも踏まえながら、SLA研究の知見から忙しい先生方でもすぐに実践できるヒントや、指導を見直すための考え方...もっと見る

設定

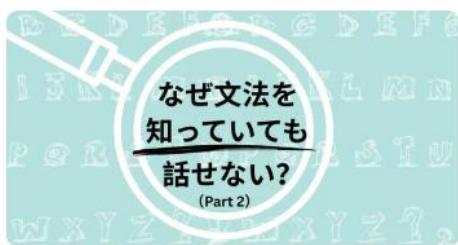


【第1回】なぜ文法を知っていても話せない? (Part 1) ~インプットから...

「文法ルールはしっかり教えたはずなのに、なぜ生徒は話せるようにならないのだろう?」先生方なら一度...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2か月前

9 9 ...



【第2回】なぜ文法を知っていても話せない? (2) ~アウトプットを通して...

前回 (Part 1) では、私たちが文法ルールを「知っている」だけでは英語を話せるようにならない理由の一つ...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2か月前

16 16 ...



【第3回】文法指導は必要か?—「文法解説+ドリルOnly」からの脱却

「文法指導は必要ないのでは?」英語教育界では、時にこのような根本的な問い合わせが投げかけられます。特...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2か月前

11 11 ...



【第4回】単語は文脈から学べ?—英語教師が知っておきたい語彙学習...

皆さん、こんにちは。早稲田大学・国際教養学部の鈴木祐一です。今回の記事では、効果的な語彙指導・...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2か月前

16 16 ...



【第5回】語彙指導は『教える』より『計画』が9割?—『4ストランド』で小中...

皆さん、こんにちは。早稲田大学・国際教養学部の鈴木祐一です。前回の記事では、語彙学習における「文...

鈴木祐一 | 早稲田大...
1か月前

12 12 ...



【第6回】「発音は通じれば良い」?
—明瞭性と理解性から考える発音指導

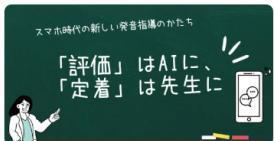


【第7回】生徒の英単語への「カナ振り」、どう向き合るべきか?

皆さん、こんにちは。早稲田大学・国際教養学部の鈴木祐一です。前回の記事では、発音指導の目標は「...」

鈴木祐一 | 早稲田大...
3週間前

14 14 ...



【第8回】「評価」はAIに、「定着」は先生に—スマート時代の新しい発音指...

皆さん、こんにちは。早稲田大学・国際教養学部の鈴木祐一です。前回の記事では、生徒の英単語への「カ...

鈴木祐一 | 早稲田大...
2週間前

7 7 ...

さらには・・・YouTube・オンラインセミナーも



Sherpaメンバー



金谷 憲 先生
東京学芸大学 名誉教授



白倉 美里 先生
東京学芸大学 准教授



大田 悅子 先生
東洋大学 准教授



鈴木 祐一 先生
早稲田大学 准教授



砂田 緑 先生
東京学芸大学 非常勤
講師



岡田 朗彦 先生
日本大学 教授



高山 芳樹 先生
東京学芸大学 教授

Sherpaメンバーの
プロフィール

Sherpaプロジェクト

金谷憲先生（東京学芸大学）を中心とする、高校の英語の先生方をサポートする支援プロジェクト

その① オンラインセミナー（Zoomで毎月開催）

その② 出張研修

その③ YouTube動画（ほぼ毎週配信）

まとめ1 研究者と実践者がコミュニケーションする

ISLA研究の成果を、論文化するだけでなく、どのように役立てたいかまで考える

- 研究成果を「研究者以外」にも知ってもらう（教師、教育委員会、出版社、政策関係者）
- （研究者キャリアのどこかで）どのように実践に関連するか、少なくとも自分は「なぜ」この研究をしているか考える機会があるといい。

※我々の研究知見が、教師の指導上の意思決定にどのような影響を与えるかを実際に検証した研究は極めて少ない（例外として, Kamiya, 2016）。

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する



実践者の問い合わせに応じた研究とは？

- What research questions interest TESOL members? (J.D. Brown, 1991)
 - 1000名のTESOL会員 : If you had a magic wand, what single research question would you like answered?
- Pica (1994): よく教師に尋ねられた10の質問
 - 文法指導、発音指導、エラー訂正、ドリル練習の役割、グループワーク等

実践者の問い合わせに応じた研究とは？

- 研究者が考えたResearch Questionよりも、教師の問題意識に応えるべきである (Pica, p. 50).
- ISLA研究を計画する際、「教師の指導上の意思決定に、影響を与えるか？」を必ず問うべき(Hwang & Coss, 2025)。

今の日本の外国語教育において、実践者の問い合わせには何があるか？

「教師」出発だけでは、限界点もある

- 教師が、必ずしも知りたいことを、熟知しているとは限らない
- 教師の疑問が、そのまま研究で扱える問題であるとは限らない
 - 例:教材の使い方、生徒が寝ない教え方、生徒が食いつくテーマ、英語力の違う生徒が混在するクラスでの教え方
- 教師が経験したことのない選択肢・新しい考え方を提示するのも研究の重要な役割
- 研究者が提示する選択肢は、現実的に実現可能なものであるよう心がける必要もある→どうやって現実的かどうか判断すれば？

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する



研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

実践を理解する（特定の教育場面における現状把握）

日本の高校での英語教育

1. 文法指導
2. 語彙指導



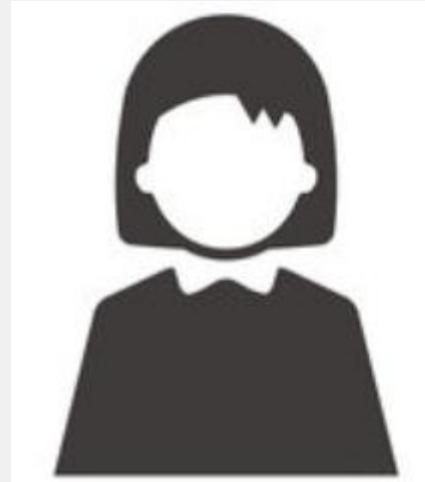
「活動中心」の英語授業を行っている教師は、どう解説している？

3年以上、活動中心の高校英語授業(PPP型授業)を行っている3校の先生にインタビュー調査(臼倉・鈴木, 2025)

A先生



B先生



C先生



D先生

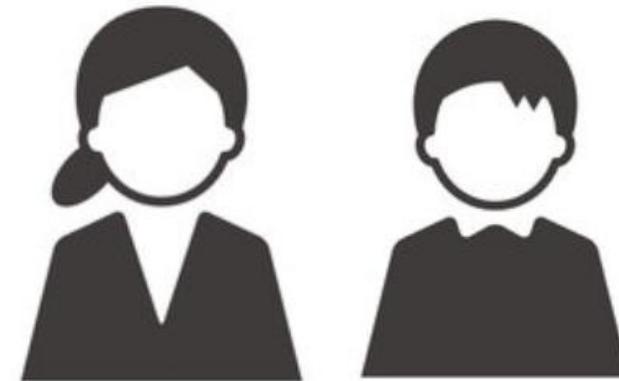


E先生



学校C：D先生・E先生

ある学校：偏差値54程度



公立高校教員歴15年以上

「活動」の中で、どうやって文法指導？

1. 内容を理解するときに誤解してしまうような英文
2. 書き手の主張やメッセージをより正しく理解するために必要な事項
3. **Reproduction(再話活動)をするときに必要な知識**



これらに該当する項目についてのみ、文法解説を行う

「活動」の中で、どうやって文法指導？

Reproductionをするときに必要な知識

例) LANDMARK Ⅲ Lesson 2 Blood is Blood
(血液の研究と差別撤廃に生涯をささげた黒人医師)

Although his work saved thousands of lives, the Army told the Red Cross to keep blood donated by black people separate from blood donated by whites …(中略) There is no such thing as “black” or “white” blood.

▼
Reproductionに不可欠 + 正確に伝えなければならないメッセージ

どの文法を教える？
そして、なぜ教える？



研究者の学び：教師の「理論」を理解できる

活動中心の授業は、解説を絞らざるを得ない

優先順位

解説より活動

- 生徒の英文理解度に合わせた絞った明示的指導

明示的指導を取捨選択

- アウトプットから逆算した計画された文法指導

教師：研究者からの質問によって、教師の「暗黙知」を言語化できた

研究者：教師の「理論」を理解し、ISLA研究の「理論」との繋がりを感じた

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

日本の高校での英語教育の現状把握

1. 文法指導
2. 語彙指導



【高校における「単語集」を用いた単語テストの実態調査】



■第1部：その単語テスト、「当たり前」になつていませんか？

- 【調査結果1】 テスト結果を85%が成績に反映。一方で「成績に含めない」ことのメリットも
 - 【調査結果2】 選ばれているのは「教科書+α」の単語を学べる単語集
 - 【調査結果3】 出題形式の定番と、見過ごされがちな「音声」の重要性
 - 【調査結果4】 教員の期待と実践のギャップ—「習慣化」を促すために
 - 【調査結果5】 見過ごされる教科書？—教科書ベース単語テストはたった2割の実施率
 - 【調査結果6】 単語集の「目的」を見直してみよう

まとめ

■第2部：最適な単語テストの「スケジュール」とは？

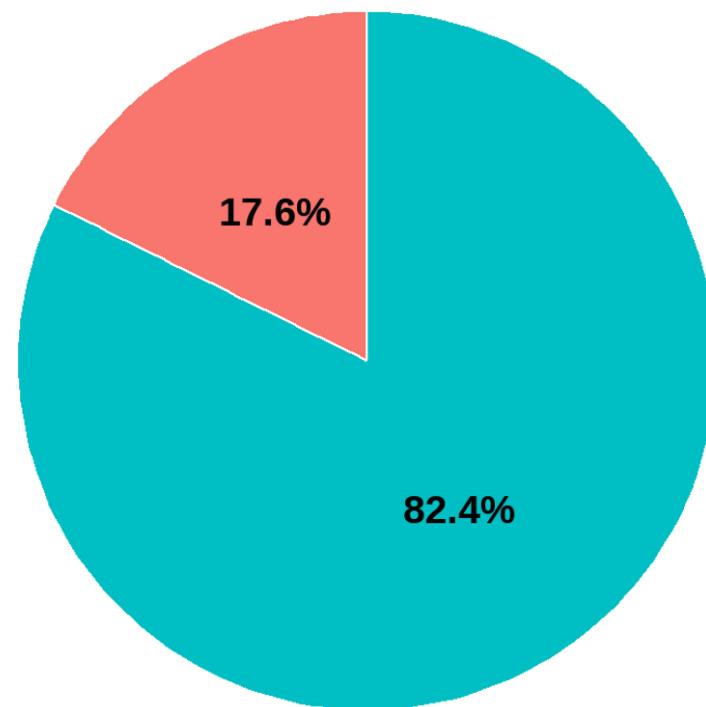
- 【調査結果1】 テストの現状：頻度は「週1回」、範囲は「50 or 100語」が多数派
 - 【調査結果2】 最大の敵は「忘却」—長期記憶の定着には「累積テスト」を活用
 - 【調査結果3】 記憶定着の鍵は「定期テストとの連携」と「復習の間隔の長さ」

まとめ

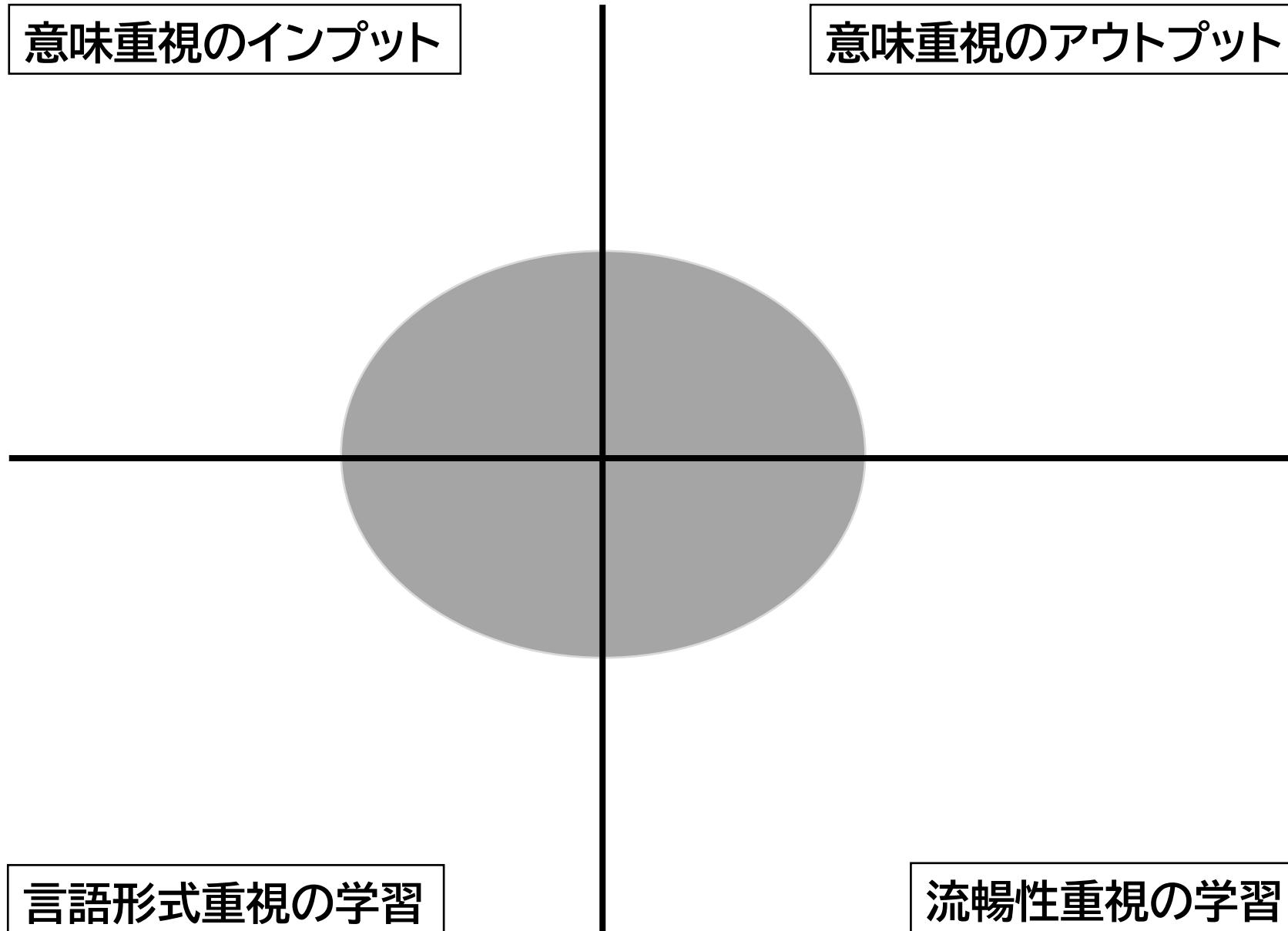
高校での単語テストの実施率は8割

高校科目を教える英語教師 ($N = 326$ 名)

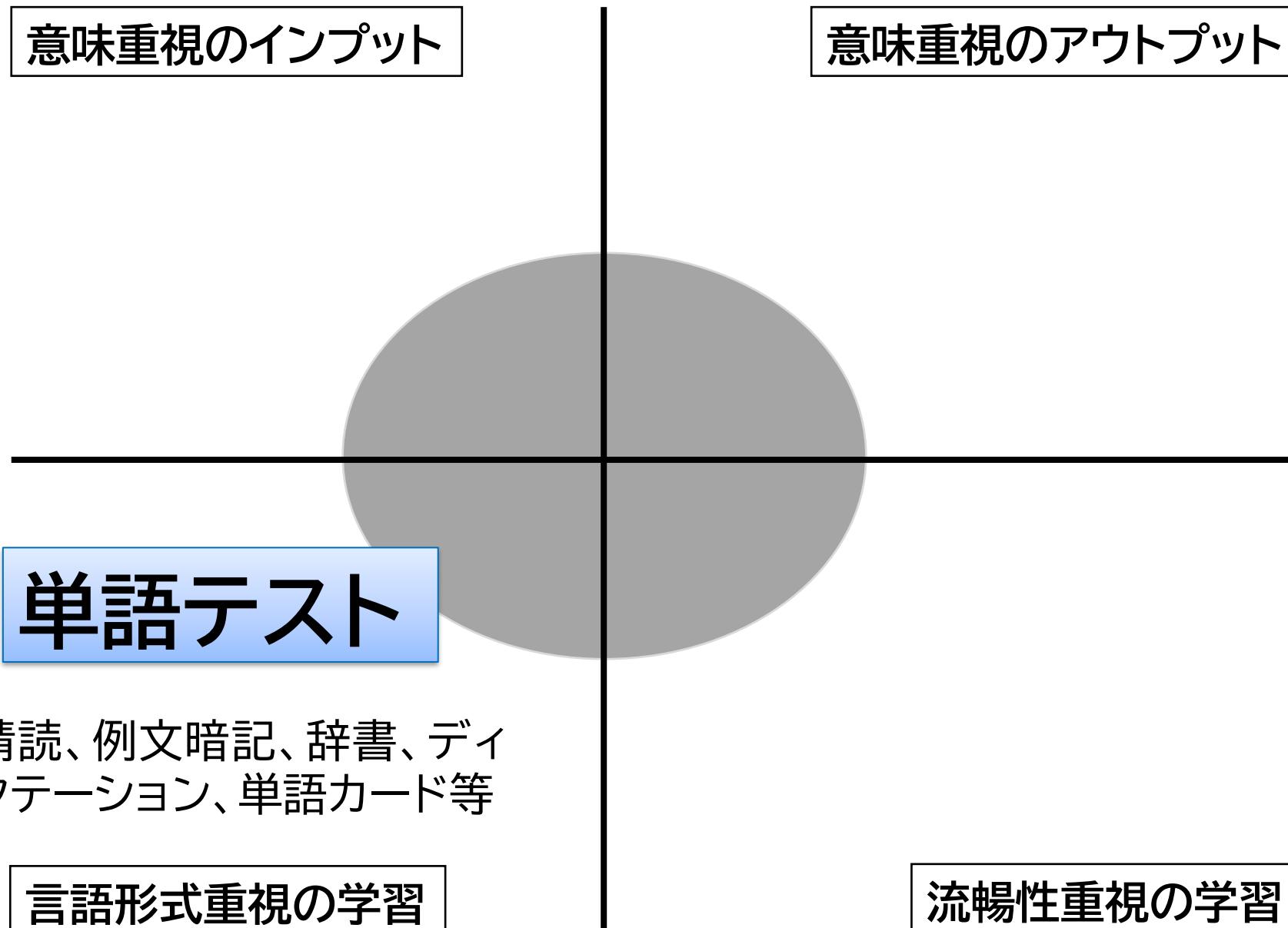
単語集ベーステスト実施の割合



単語テストは4ストランドだと？



単語テストは4ストランドだと？



意図的学習と偶発的学習のバランス→言語活動で考える

意味重視のインプット

単語テスト

精読、例文暗記、辞書、ディクテーション、単語カード等

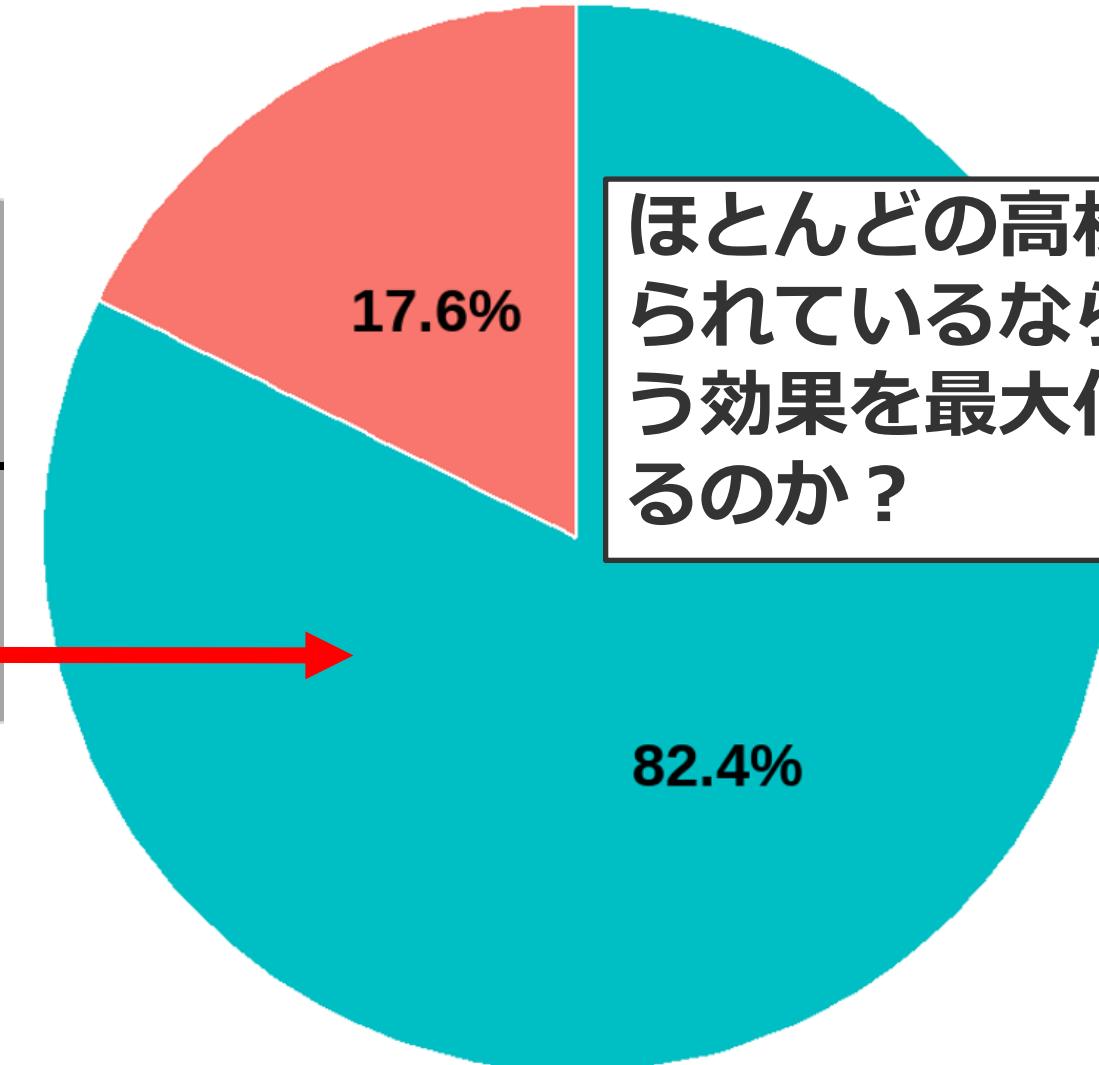
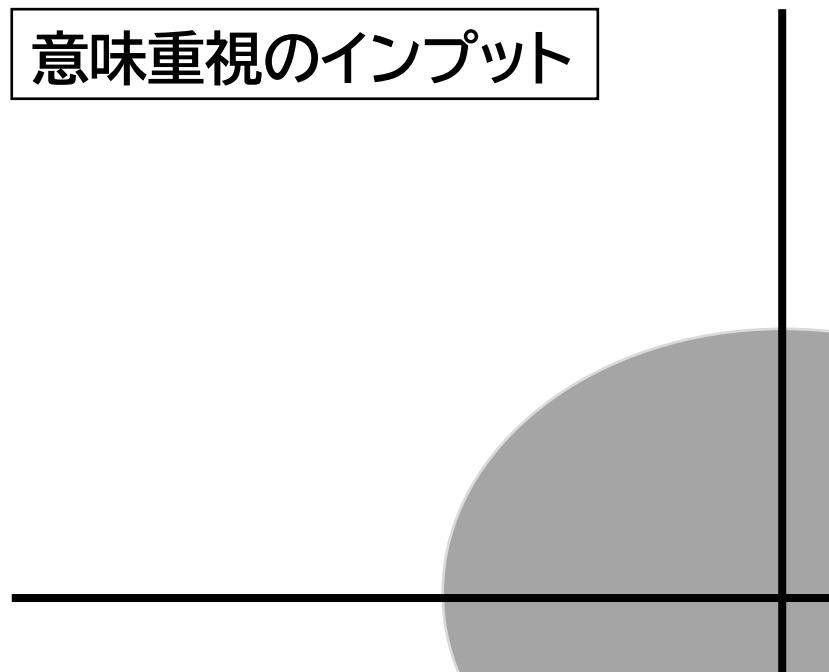
言語形式重視の学習

単語集ベーステスト実施の割合

17.6%

82.4%

ほとんどの高校でや
られているなら、ど
う効果を最大化でき
るのか？



単語テストの効果的な実施スケジュールへのヒント

通常のテスト (非累積テスト)

単語	小テスト1	小テスト2	小テスト3
31-45			
16-30			
1-15			

ランダムテスト(全ての出題範囲から15問)

単語	小テスト1	小テスト2	小テスト3
1-45			

累積テスト(累積する出題範囲から15問)

単語	小テスト1	小テスト2	小テスト3
31-45			
16-30			
1-15			

←31-45の単語は繰り返しがないので、定着がよくない

そもそも論・・・・

意味重視のインプット

意味重視のアウトプット

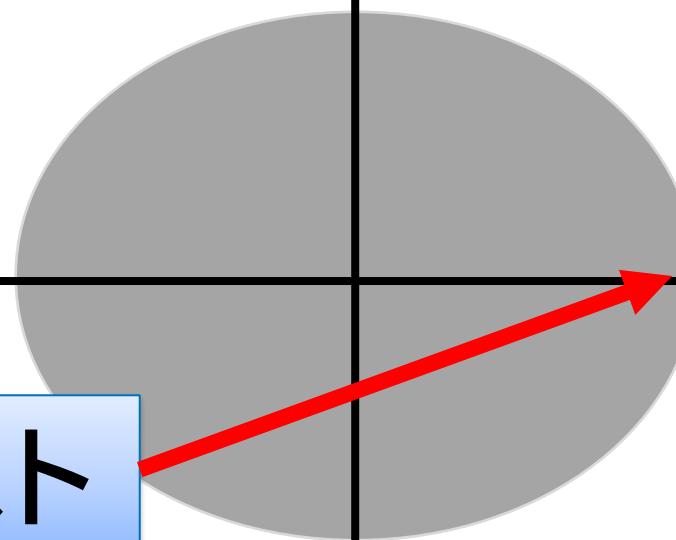
単語テスト

精読、例文暗記、辞書、ディクテーション、単語カード等

言語形式重視の学習

単語学習は、4つのストランドを編み込む必要がある

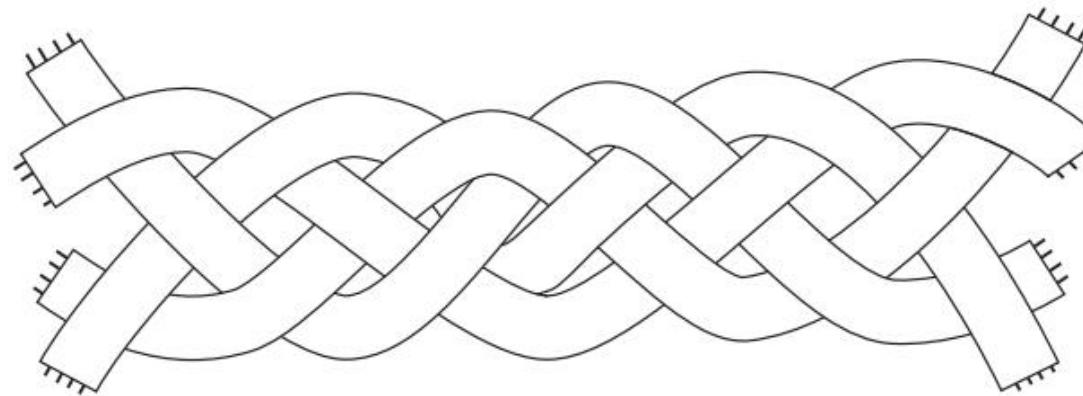
流暢性重視の学習



意図的学習と偶発的学習のバランス

意味重視のインプット

意味重視のアウトプット



4ストランドを編み込むイメージ

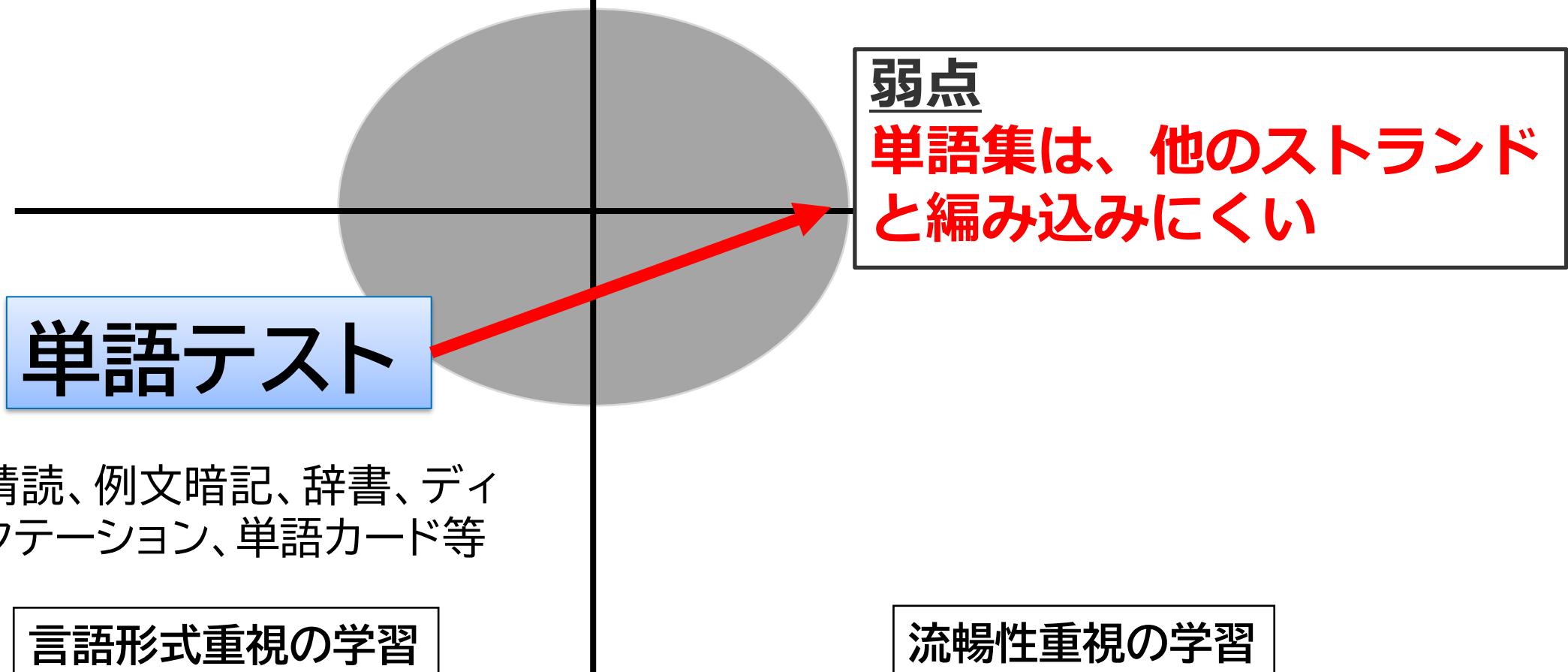
言語形式重視の学習

流暢性重視の学習

そもそも論・・・・

意味重視のインプット

意味重視のアウトプット



そもそも論・・・・

意味重視のインプット

意味重視のアウトプット

メイン教科書(検定教科書など)
の語彙は?

単語テスト

精読、例文暗記、辞書、ディクテーション、単語カード等

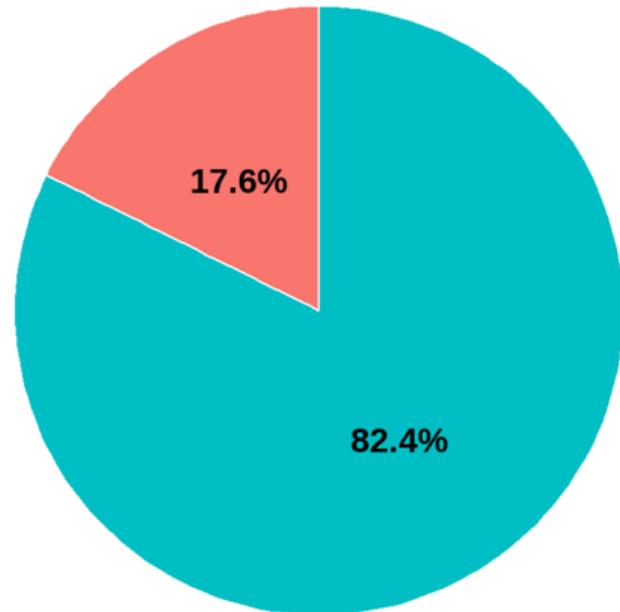
言語形式重視の学習

流暢性重視の学習

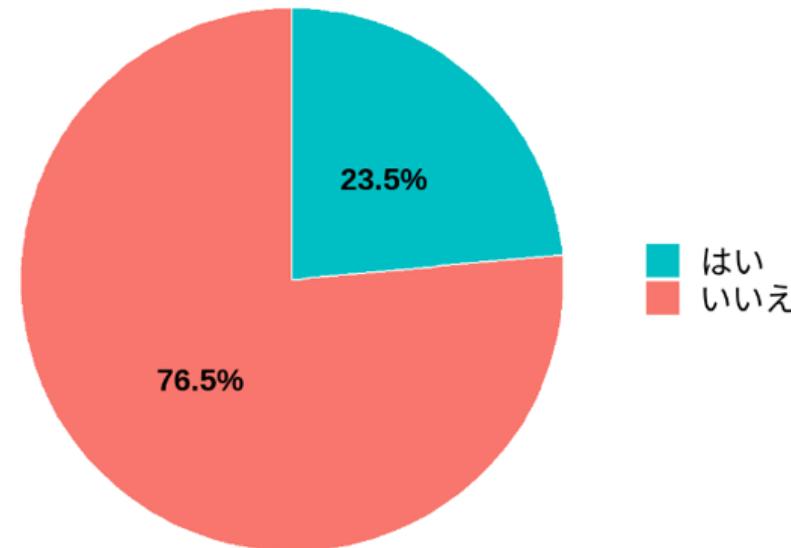
逆転現象：

「単語集」テスト実施率は**8割**、「教科書」の単語テストは**2割**

単語集ベーステスト実施の割合



教科書ベース単語テスト実施の割合



研究テーマ（案）：単語集の語彙・教科書の語彙の習得状況・発達プロセスはどうなっているか？

そもそも、なぜ単語集がポピュラーなのか？

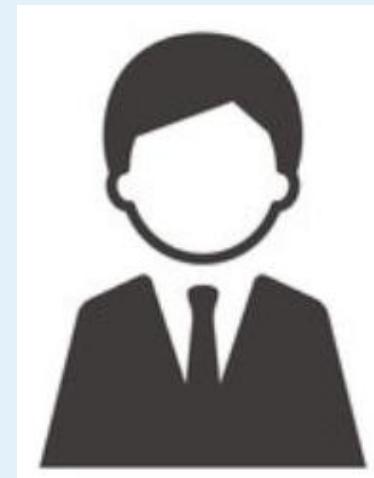
いる派 英語力の中で語彙が重要だから

いらない派 文脈が重要だから、単語集より教科書

いる派 教科書だけでは大学入試への語彙が足りないから

現状把握の必要性：

単語集と教科書では、どのような
単語がカバーされているのか？



教科書・単語集・入試コーパス研究プロジェクト (2025 -)

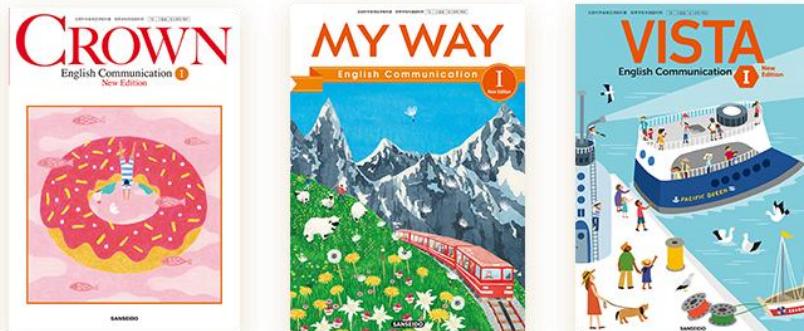


水本篤
(関西大学)



佐藤剛
(弘前大学)

高校「英コミ」英語検定教科書 (24冊)



単語集31冊

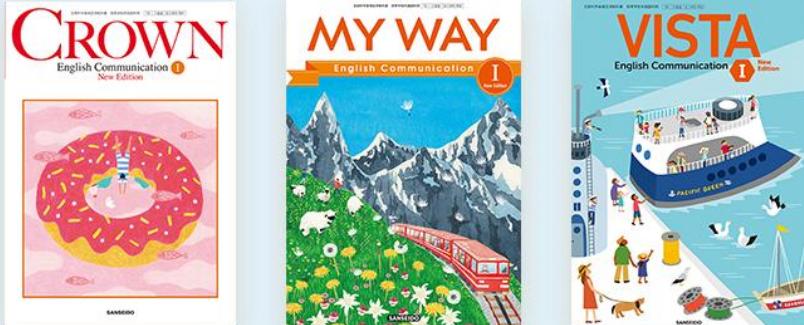


入試
(国立・私立)

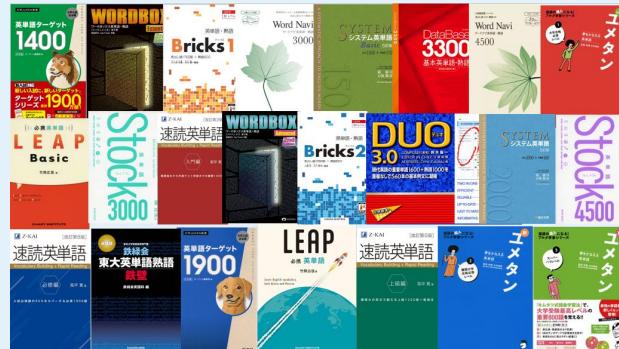
クイズ

「単語集」と「検定教科書」の共通語（重複率）は、何%くらいだと思いますか？

高校「英コミ」英語検定教科書



単語集



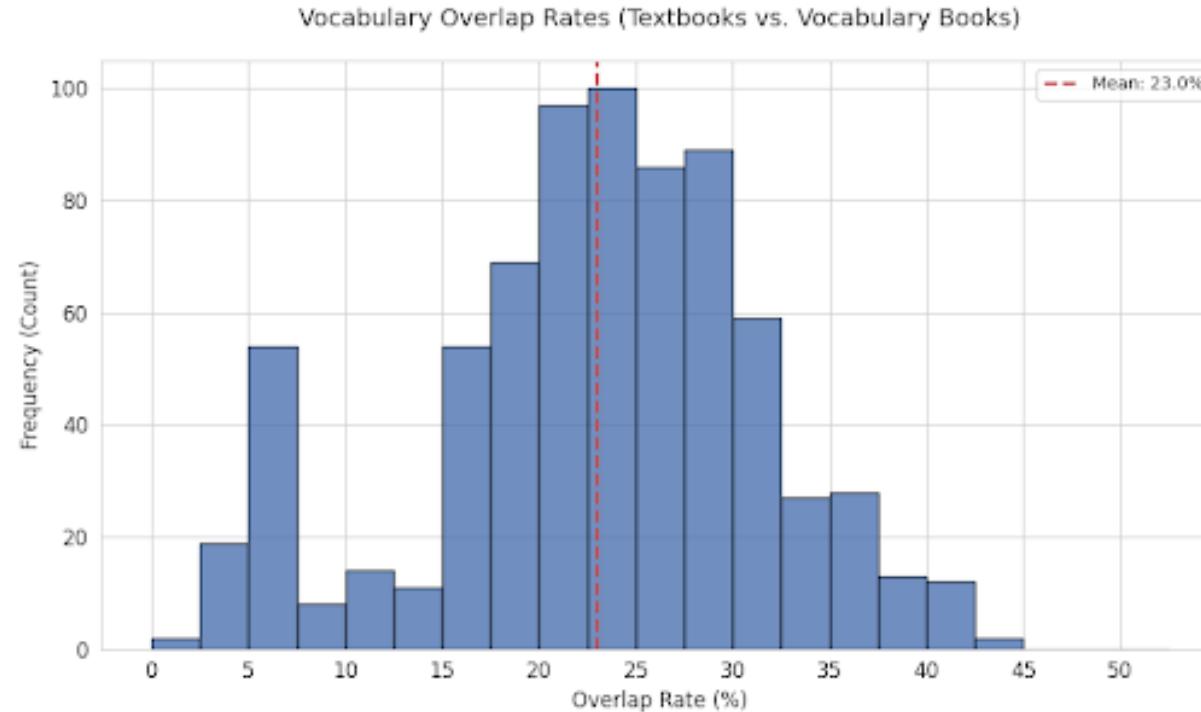
正解は・・・

「単語集」と「検定教科書」の共通語（重複率）

- 10%
- **20% (★正解：23%)**
- 30%
- 40%
- 50%
- 60%
- 70%以上

「単語集」と「検定教科書」の共通語（重複率）

平均23% (幅: 2% - 44%)



研究テーマ（例）：
重複率と語彙習得の関係性は？
そもそも教科書の語彙の習得率は？

まとめ3 実践を理解する（現状把握）

（多くのISLA研究）エビデンスの積み上げ、理論構築

指導法の効果検証・習得研究



実態把握研究

研究者

実践者



教室での実践

様々な制約

（社会・制度、教室、教師、学習者教材）

研究者と実践者の接点を探る

1. 研究計画へのヒント
2. 研究結果が、現実的かつ実務に繋がりやすい

学習者

3. フォローアップの高い問題を特定できる可能性
4. 研究者・実践者の共にメリットがある

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する（学校単位）
5. 「実践者－研究者」が研究する



なぜ研究と実践にはギャップが起こるのか？

研究と教育実践の性質は大きく異なる

1. 一般性(Generalization)と特殊性(Particularization)
2. 包括性 (Comprehensiveness) と局所性 (Locality)
3. 厳密さ(control)と自然さ(natural)

どのような研究方法であれば、バランスを取れるのか？

コンテキスト：1980年代のコミュニケーション・アプローチ全盛期。

研究きっかけ：「意味のやりとり優先」と「言語形式の正確さにも注意を向けさせる指導」の2つの指導パターンがあることに気づく。

研究：データを収集した結果、コミュニケーションの中で言語形式の正確さに注意を促している教師の生徒の方が、正確かつ自信を持って流暢に話せることが明らかになる。



カナダ・ケベック州における研究

- ・この発見を教師に伝えたところ教師も興味を示し、研究者と教師による協働の実証研究へと発展する。
- ・研究プロジェクト終了後も、教師たちがプロジェクトで共同作成した教材の使用を希望する等、知見の持続可能性が示された。

循環的な研究プロセス

授業観察→教室実験→フィードバック

日本の高校を対象にした研究は？

「現場型リサーチ」（金谷, 2008, 2014）

- 青森県田名部高校での「TANABU Model」（金谷・堤, 2017）
 - レッスンごとに教科書の扱いを変えることで、4技能を身につけさせる授業カリキュラム（PPP型授業と解釈できる）
 - GTECなどの外部試験の成績が向上

カリキュラムの効果を長期的に定点観測する
新カリキュラム考案→実践→改善のループ



まとめ4 実践者と研究する

教師との信頼関係を築きながら、長期間に渡る研究

- 自然な教育環境のまま、より持続可能なアプローチ
- 厳密なSLA研究は、研究対象にかかわる諸条件を出来るだけ統制した実験により、「エビデンス」を得ようとする。
 - 弱点: 得られた成果を、学校現場に応用しようとしても難しい。
- 特定の学校で、長期にわたって同じ教育を繰り返し、共通した成果を追認できることも、ある意味「教育効果の一般化」と捉えることができるのではないか (e.g., Spada, 2005)。

研究と実践を繋げるためのISLA研究（案）

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する

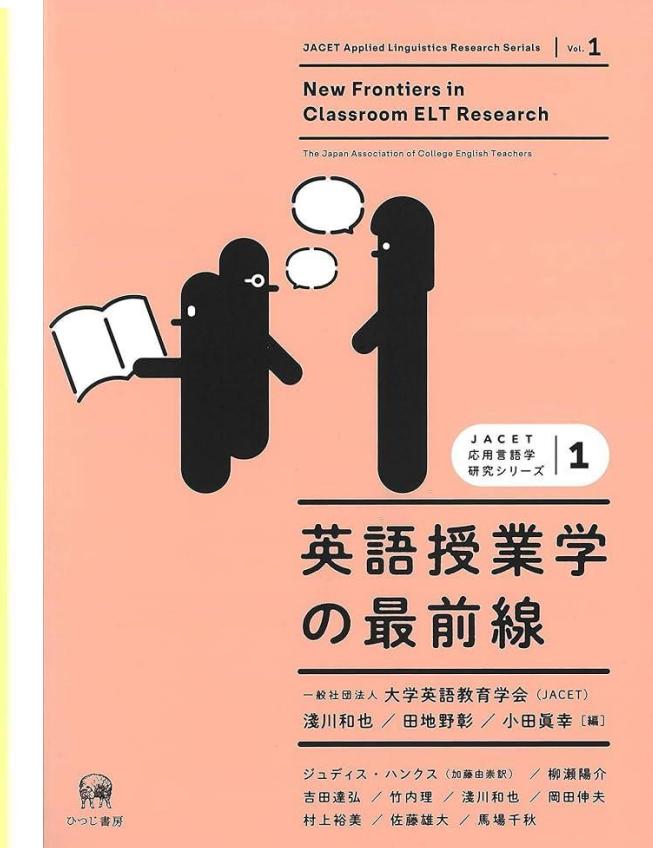
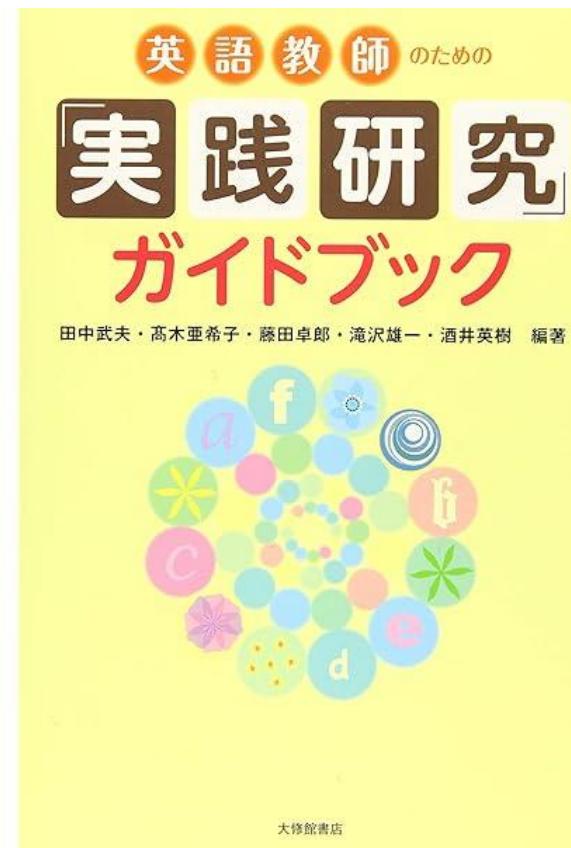
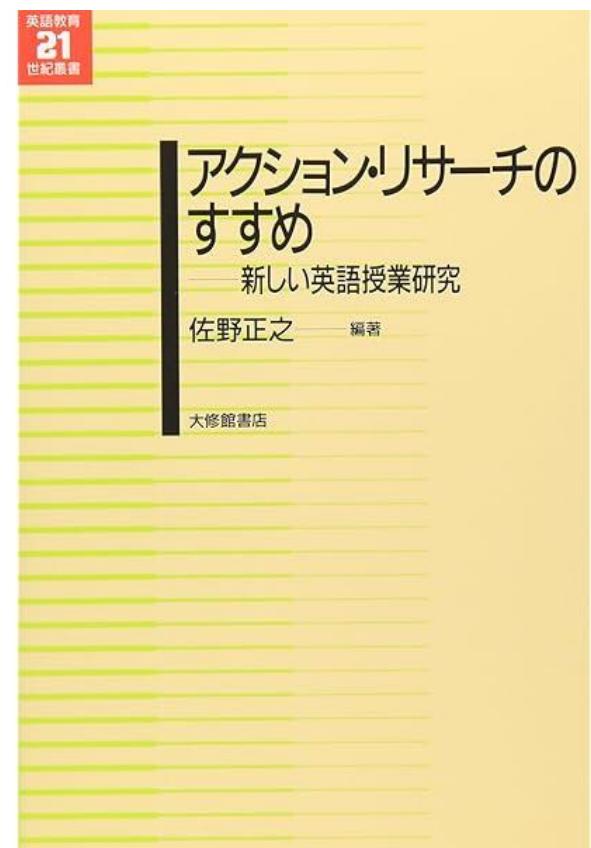


実践者研究(practitioner research)：実践者→研究者

アクション・リサーチ

リフレクティブ・ プラクティス

探究的実践 (Exploratory Practice)



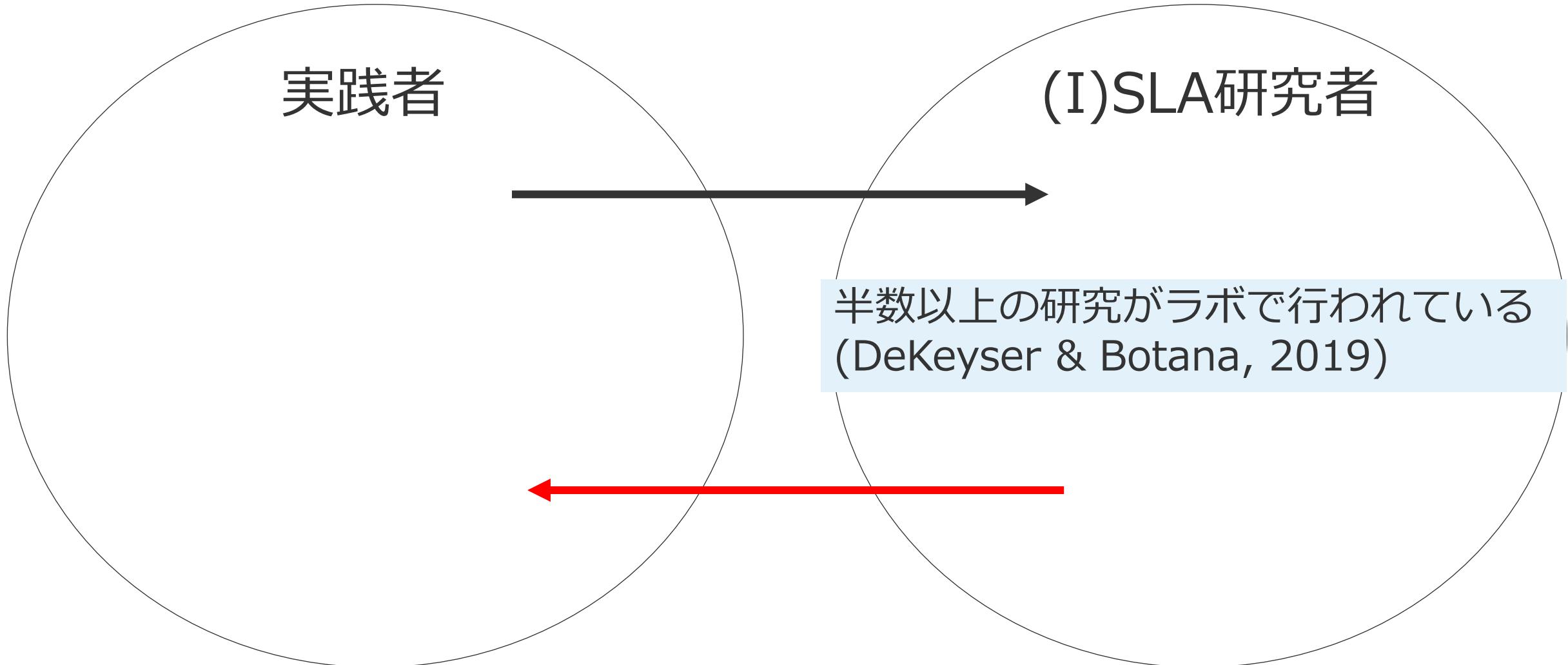
実践者研究 (Practitioner Research)とは？

教師自身が抱える問題解決を目指し、研究と実践を有機的に結びつけながら、系統的な授業改善を志向する研究アプローチ。

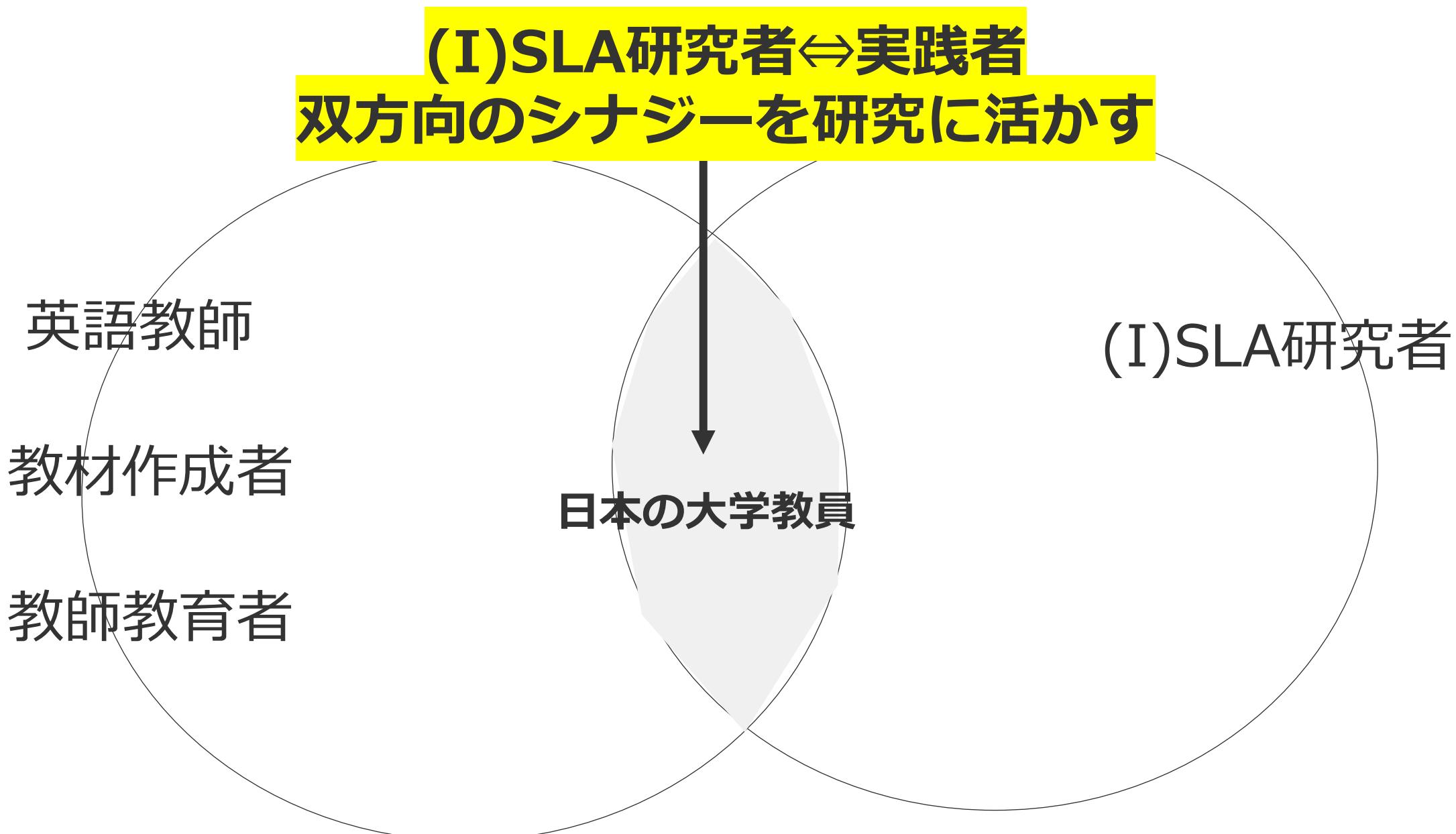
→教師が自らの指導環境に合わせ、効果的な指導を探索し、授業改善を目指す。

教師が研究的な視点を持つ：教師→研究者

研究者↔実践者の双方向の矢印を向けられないか？



研究者↔実践者の双方向の矢印を向けられないか？

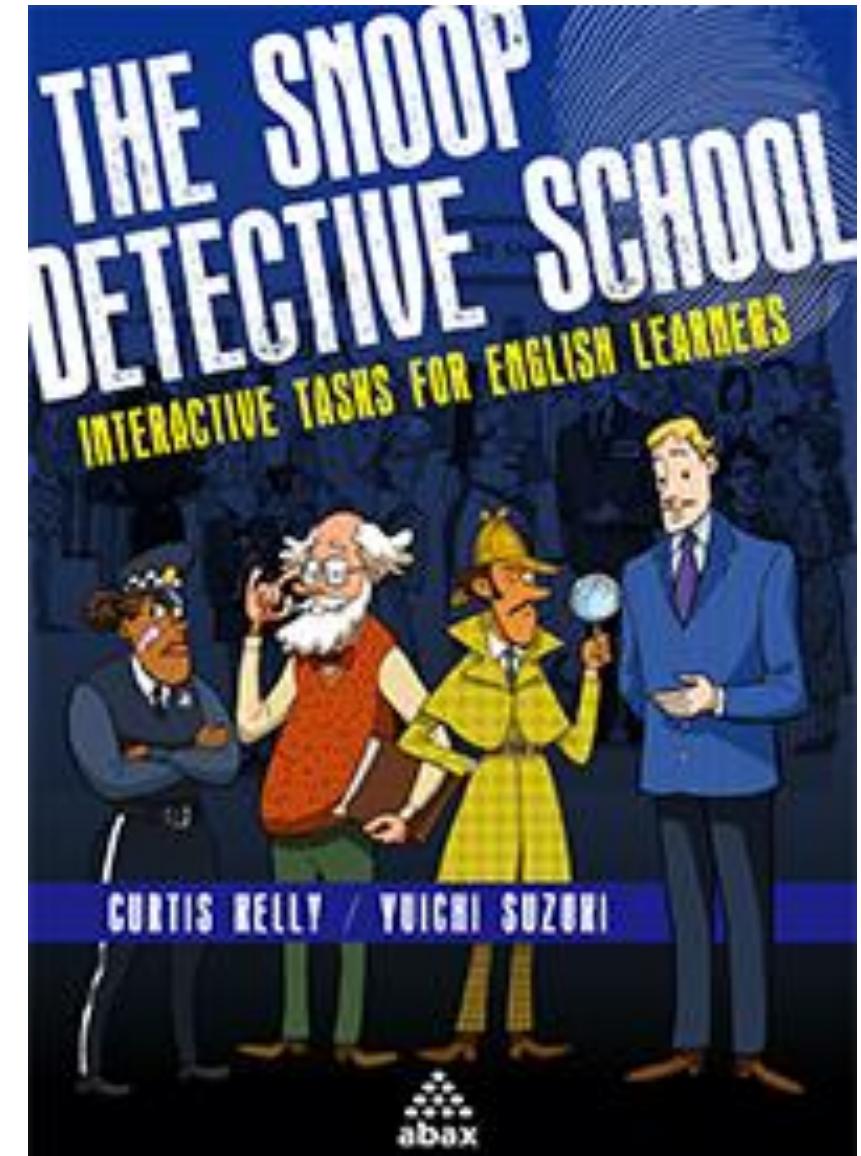


タスク・ベースの教科書の例

Kelly & Suzuki (2025). *The SNOOP detective school: Interactive tasks for English learners.*
ABAX.



Curtis Kelly
(関西大学)



A sample task: Industrial Spy Task

Industrial Spy A

You can see a video taken by a security camera.

“Dr. Fear has sent an industrial spy to destroy data. Find out what the spy does.”

Step 1 Report the office break-in

You can see the spy enter the building from a security camera next door. Your partner sees the back of the building. Tell your partner what the spy does.

It's 3:35 am. Do you see a parked truck?

Industrial Spy Checklist

- Report how the spy entered the building. 1
- Report how the spy damaged the office. 1
- The Spy's name is 2

Write your points on the Snoop points page.

3:35, 3:40, 3:43, 3:53, 4:15, 4:20, 4:25, 4:40, 4:45, 5:10, 6:25, LATER

Industrial Spy B

You can see the back of the building.

“Dr. Fear has sent an industrial spy to destroy data. Find out what the spy does.”

Step 1 Mark what happened

This is the back of the building before the spy came. Your partner is watching a security camera film (from next door). Write down what the spy does in the chart. Mark the time and circle the place on the picture.

What is the spy doing?

Mark time and place.

3:35 - 3:40

CLEANING

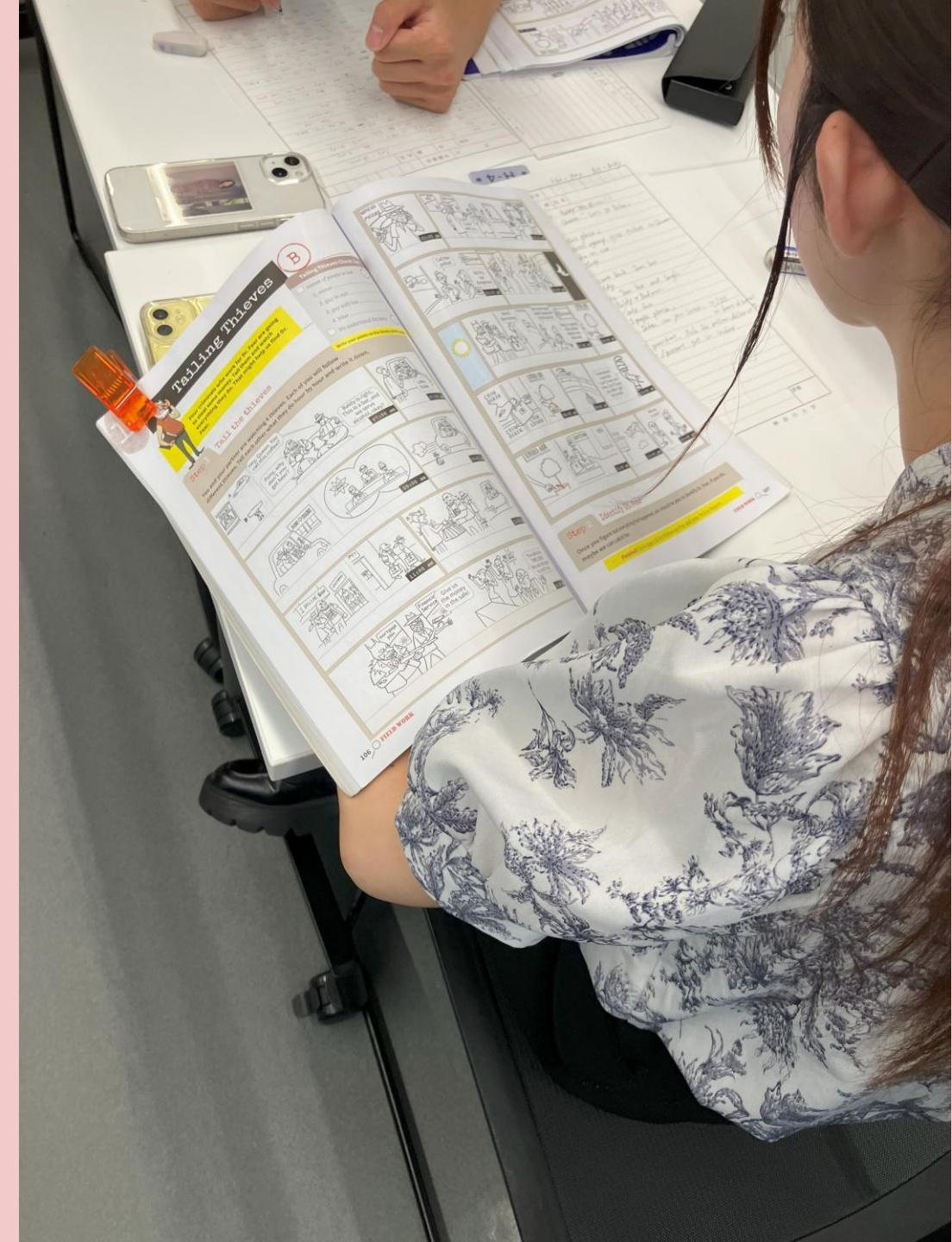
教室から着想を得る
先に語彙・コロケーションを教
えるとどうなるか？

Industrial Spy Task 

表現リスト

このタスクを遂行する上で役に立つ『表現リスト』です。
必要に応じて、表現リストを参照しても構いません。

はしごを登る	climb up a ladder
薬を入れる	put a drug
銃を撃つ	shoot a gun
防犯カメラの電源を切る	switch off a security camera
ワイヤーを切る	cut a wire
窓から侵入する	enter through a window
穴を開ける	make a hole
足跡を残す	leave footprints



先に明示的な文法・語彙指導は行うべきではない (e.g., Rod Ellis & Mike Long)



**語彙指導を先に行なうことは効果的なタスク前の準備になる
(e.g., Jane Willis & Norbert Schmitt)**



大学での一般英語の授業

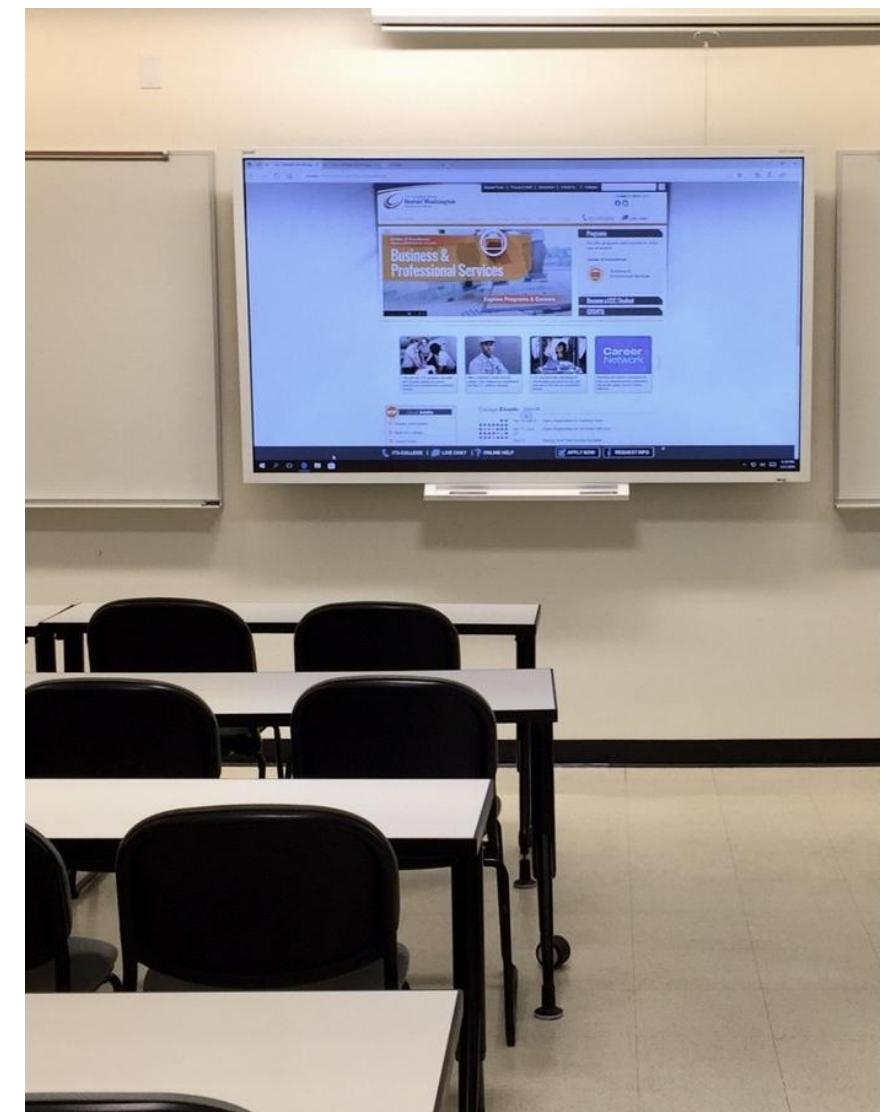
Classroom research



Yuichi Suzuki
(Waseda University)



Sachiko Nakamura
(Tamagawa University)

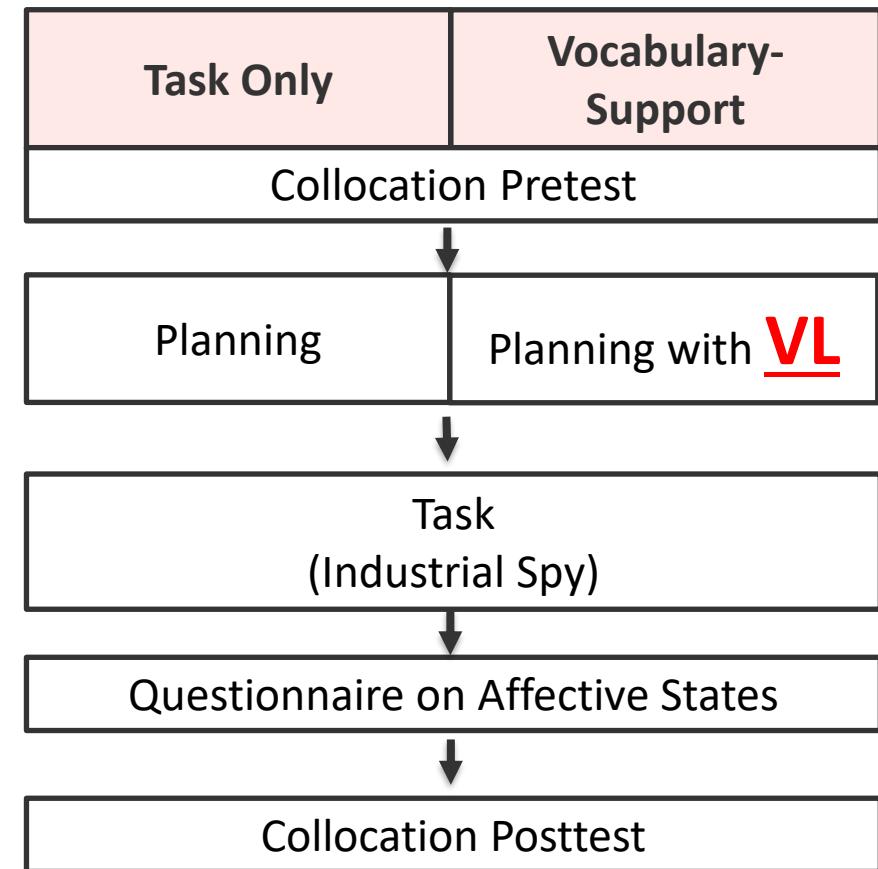


学習条件の比較：

- 単語リストなし (Task Only)
- 単語リストあり (Vocab-Support)

効果測定：

- 語彙習得
- 学習者心理
 - 感情(enjoyment, pride, anxiety, etc.)
- 結果予測
 - 語彙習得・ポジティブな心理ともに、単語リストありの方が高い



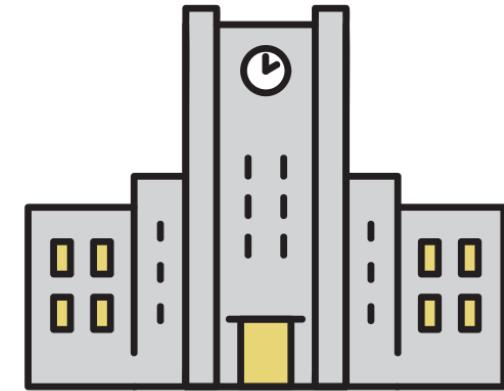
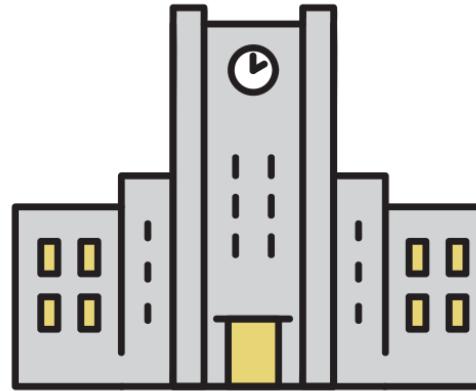
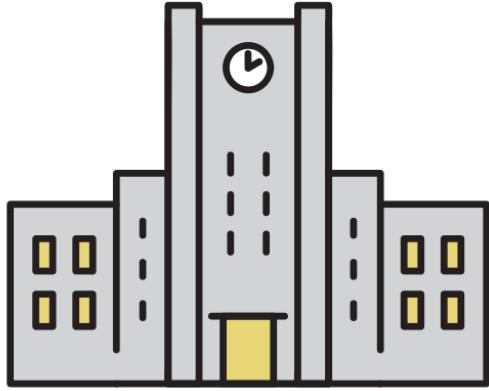
結果

- ・ 単語リストで練習を先に行うと語彙習得が進む
- ・ 単語リストなしでタスクに取り組むと
 1. タスクへの取り組み：やり取り(エンゲージメント)が増えた
 2. アンケート・インタビュー結果：
 - ポジティブな感情が上がる(enjoyment, pride, perception of partner collaborativeness)
 - ネガティブな感情が下がる(anxiety, boredom)

語彙学習と学習者心理のトレードオフがある

他の大学の英語授業にも一般化できるか？

教室は複雑な生態系



各教室ごとに独特的な雰囲気や教師・生徒の関係性があり、
様々な感情が渦巻いている
(感情以外の要因：英語力、学部・学科、動機づけ)

Multi-site study

- 複数の地域・大学・教室で調査を行うことで、研究成果の一般化の度合いを探ることができる。
- 効果があるかないかだけでなく、いつ、どのような条件下で指導の効果が見られるのかを特定することを可能にする

*サンプルサイズも増やすことで、統計分析の検定力も高まる

追試・Multi-site・事前登録した研究 (Suzuki et al., in progress)



Sachiko Nakamura
(Tamagawa University)



Masato Terai
(Aichi University of Technology)



Keiko Hanzawa
(Tokyo University of Science)



Atsushi Miura
(Waseda University)



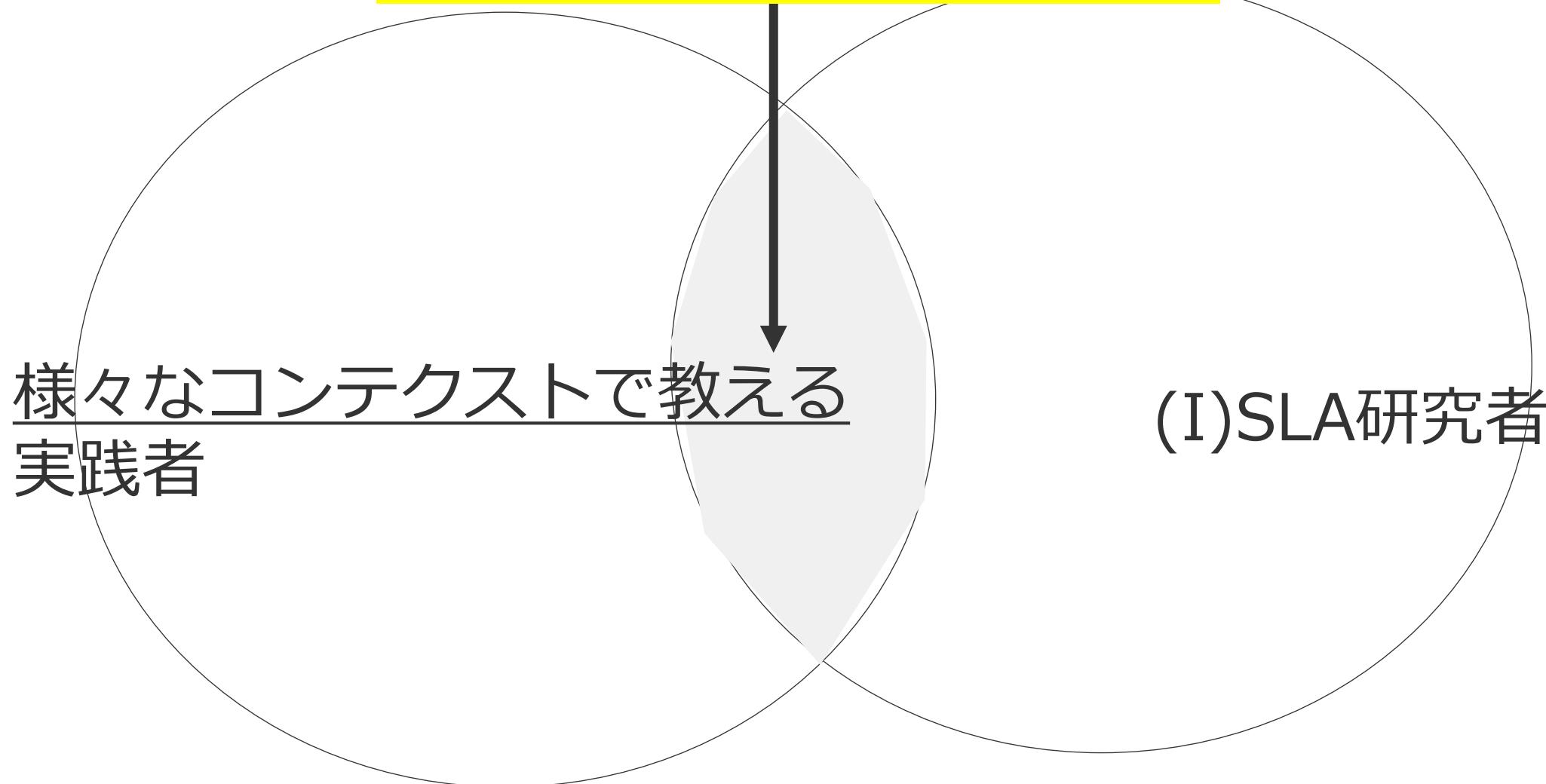
Yurika Ito
(Kanagawa University)



Ryosuke Mikami
(Aichi Gakuin University)

(日本の) SLA研究者の多くは、実践者でもある

(I)SLA研究者↔実践者
双方向のシナジーを研究に活かす



研究者↔実践者 (Researcher-as-Teacher) の強み

- 文脈 (コンテクスト) への深い理解
 - 教師=研究者は、自身の指導現場の文脈を熟知している
 - 自身の教室への理解は、研究の方法への判断にも役立つ
 - 指導効果を推し量る上で、重要な文脈的要因（例：動機の種類、教室文化、生徒要因など）に役立つ可能性がある

研究者↔実践者 (Researcher-as-Teacher) の強み

- 基本的な研究アプローチ
 - 一人の研究者が単一の場所で研究を行う→一般化可能性と再現性に限界がある
 - メタ分析では、多くの文脈的情報が失われるため、得られる知見の解釈が限定的
- Multi-site study
 - 研究者のネットワーク→多様な教育環境での調査→より頑健なデザイン→特定の文脈を失うことなく、一般化可能性を探ることができる

まとめ5 「実践者－研究者」が研究する

- ・ 「実践者－研究者」である複数のアイデンティティを最大限活かすという視点を持つことも一つの選択肢
 - 日々の教育実践の中に研究テーマが見つかることがある。
 - 研究者同士が協働することは、「研究の質」を高める上でも重要
- ・ 日々の実践と研究が繋がることで、「実践者＝研究者」の両者のアイデンティティを補完して、研究者のウェブビーイングも高まる
- ・ 既存のカリキュラムと統合する視点も必要(Leow, 2019)

第3部まとめ 研究と実践を繋ぐためできることは？

研究と実践の接点を積極的に作り出し、
「研究↔実践」の双方向的・循環的な関係を築く努力を続ける

1. 研究者と実践者がコミュニケーションする
2. 実践者の問い合わせに応じた研究を行う
3. 実践を理解する（現状把握）
4. 実践者と研究する
5. 「実践者－研究者」が研究する

本講演ふりかえり 研究と実践を結ぶための3つの視点

第1部
ISLA研究の知見の使い方

知見 = 一般性・指導原理

第2部
研究と実践のギャップ

教育 = 複雑性・多層性

研究と特定の文脈の「往還」

第3部

ISLA研究の新しい方向性

双方向性・協働性

研究と実践を結ぶための3つの視点

1. ISLA研究の知見の使い方

指導の「思い込み」に気づき、新しい考え方を得て、実践を振り返り、授業改善しながら、専門性を高める

2. 研究と実践のギャップの捉え方

複雑かつ多層にも埋め込まれた言語教育・学習に、シンプルな答えなど一つもない。教師と研究者の対話が不可欠。

3. ISLA研究の新しい方向性

「研究↔実践」の双向方向的な関係を築くために、研究者側が取り組める方法がいくつもある。